百三十一

寔に惟んみるに、法身の大御親の掟は、古今不變にして、矢張り古今とても梅雨に入りぬれば、天かきくもり、氣に濕をもち、折々雨は降り勝ち、此の恵みの露にすべての植物もはぐくまるゝ、慈悲の乳ぞと思へば、ありがたくぞ感じられ候。此頃の祖山の鬱蒼としたる綠葉を眺むれば、何となく感興を覺へ候。又、萬物は皆法身如來藏の顯現とすれば、すべての中に如來の御力と御恵みとは見へざる事はなく候。あらゆる物の備へを以て、すべての子等を養ひ育み給ふも、歸する處は報身如來の無量光を以て、一切の靈性を養ひ、永遠の生命と圓滿なる靈格になさんが爲の手順と思へば、寔に大御親に廣大なる慈悲を感ずると共に、吾等子たるものは、是非とも此度は無量光の御恵みによりて、靈の卵は孵化し、眞の佛子の面目を顯はすべき身とならざるを得ぬ。それに付いては唯親子對面の出來る念佛三昧にて候。頃日勢至堂のそばに座し

て、西山の群雲の際より漏れ出づる日の影を見る時に、常にこひしたふ大御親の慈悲の面影が偲ばれ、暫く稱名の聲もれ出で候。此頃は新潟の北の潟波靜かにして、自づと三昧の狀態に入りし如くに、其鏡にすれば、大悲の面影は顯現して、定めて皆樣の心は、さながら淨土にいますの感ならむと存じ候。

祖山に來りて、餘所ながら風の便りに聞けば、昔宗祖の在世の當時、山の大衆の輩が俗にも劣れる俗情を以て互に權威を爭ひし、それにも似たる競ひ事などの噂も寔によそながら淺間敷ぞ思はる。それ等は神聖なる我が宗祖の徒にはあらずして、却つて宗祖の妨害を加へたる山徒の徒のみと思はれ、又一方には念佛弘通の宗祖の宗風を世に宣傳するに、自分に念佛の爲に僅かな口をかすさへ、ものうき顏にして、面して大道に出でゝは、大きな聲をあげて、諸人に念佛を勸むるはをかし。孔子は、己の欲せざる處を人に施す勿れと。自らあまり好ましからぬ念佛を人に强ゆるも如何かと思はる。安居會と云ふ名のみに、何をか安居の主業と尋ぬるに、安居とは、でほうだ

いの音を發して大道にわめくのであるといふも亦をかし。

今年は多くの僧の中には、志あるものもあらずなれば、志ある者と共に、三昧の會を催し度く、勸めて今夕より開場致す事に相成り候。扨て自分の事のみ言を費やし、先回來二度迄に渡り候御書翰にて承りし事後まはしせし事の失禮の段御許し玉ひてよ。御書翰に仰せらるゝ御地に如來光明會の御催しの擧につきては、寔にありがたき極みにして、會長の面目は何にしても、如來樣を會長として、而して珠數の親玉として、皆一の一連となりて、相互に慈悲を以て相向ひ、佛眼を以て相着て、佛になるまで、互に善知識となりて、勇ましく勤めたくてこそ、餘は後便に讓り候。和南

百三十二

欽啓、御遙護に依り昨日無事當寺に着候。滯在中は一方ならぬ御保護の許に病氣も疾く快方に相成り厚く御禮申上候。

歸京の上倩々顧慮すれば、實に不思議なる御因緣に依り外護を被るのみにあらず、貴君の至誠心に依り、光明會員なる清き同胞衆を得たるは、如來てふ大ミオヤの聖意とは申乍ら、誠に有がたき事に感じ候。新潟縣の中樞たる長岡市に新しき光明の宣傳の曙光を見るに到りしは全く大ミオヤの聖意とは申ながら、貴君が如來より撰ばれて此事に從ふべく使命を蒙むりたる緣に依りてと存じ、特に辱く存候。

現今物質的方面に益々發展するに隨つて、一般の眼が唯表にのみ注ぎて、自己內觀を忘るゝに到る傾向あるが如きは今日の流弊にて候。爰に於てか如來に撰れたる先覺者等に依りて、內靈性を開き、永遠の生命を發見して、人々人生の全きを得るに到る樣に相成り候はゞ、實に無上の幸にて候。御一家の如く若菜君の如き又大森御兄弟衆の如きは疾に如來より撰ばれたる同胞にて候。又法中に淺井上人あり、實に何れも得難き同胞にて候。

實は歸京の上、今日當寺に於て目擊する處、從來の信者の集りは種々の流弊があつ

て、實致に生命のある核のある內容實質に滿ちたる信者は出來ず候。如來より新しく使命を被りたる同志に依りて新しき宣傳の道を開くにあらざれば如來の思召に叶ひたる信者は出來申さず候。

太陽は太古の古き昔よりの物なれども、夫でも毎朝〳〵蒼海の清き水にて圓かなる貌を洗滌しながら、いかにも清らけく潔く快々活々として昇る。千年の古梅木でも毎年新たなる香を薫りつゝ花は咲き出づ。又新しく綠葉を芽發す。それの如く、如來の光明の宣傳も、如來は久遠實成無始無終の大光明者に在せども、其の如來の光明の宣傳はまた新しく〳〵世の人々の心靈に照らされねばならぬと信ず。

念佛は是れ如來の清淨光歡喜光智慧光不斷光なれば、念佛衆生は念々に此の清淨歡喜の光明に清められ、快々喜々の精神の日暮しを爲せて下さる。此の清淨歡喜智慧不斷を表せる光明名號なれば、念ずる衆生は實に清淨となり歡喜となり智慧となり常恒不斷の聖意現はす働きを爲さして下さる。

信者のみにあらず、此の信者の家は矢張清淨なり歡喜なり平和なり幸福なり。一切の慶事は此の光明の在る所に格る。一切の魔事不祥事は此の光明の欠げたる處に發す。

願くは長岡の清き同胞衆、光明の爲には平和と光榮とあらん事を是れ祈る。御禮かた〳〵斯の如に御座候。

願くは諸〳〵の同胞衆に宜敷御傳あらん事を。

百三十三

肅啓。時下寒威嚴しく候處御全家益々御清榮萬福奉賀候。

おもふに宗敎の第一に信ずべき事は、絶對的に大なる大ミオヤを信じ、常にミオヤを心の妻に掛けて忘れぬ樣になる事が大事にて候。

佛敎に晨朝に六念を誦せよと勸めてあり候。其第一に念佛救世大慈父。佛は是れ世

を救ひ給ふ大慈悲の父に在せば之を念じて忘るゝ勿れてふ意味に候。

法華經には三界は我が有、其中の衆生は悉く皆我が子と示され候。又法華經には如來は眞實のミオヤにて衆生は悉く其子にて候よしを細やかに説示し給ふ。又善導大師は一到彌陀安養界元來是れ法王の家と。意は、一度彌陀安養の淨土に到と云ふは實には本のミオヤの本家に還るのであるとの義。

一度迷出でたる故にミオヤの本國を他鄕と思ふものにて候。大ミオヤはもと一體に在せども一度絶對無限のミオヤの許を迷出し相對生死の世界に生を受けたる人々のために三身に分れて總ての子等を養成し攝化し給ふ。

法身としては天地萬物の法則の本體にして日月星辰地上の萬物悉く法身の法則に依りて生れ活き卽ち活かされ居り候。現に我れ人が活きつゝあるは全く法身の則りとみ惠みとに依るものにて候。故に是れを產みのミオヤと申候。

報身としては法身より受けたる我等が佛性は鷄の卵の如くにて佛と成るべき性は持

つて居るものゝ只獨り手に佛になる事は出來ぬ。報身の智慧と慈悲との光明に攝められて、我等一心に念佛すれば、攝取の光明は念佛衆生の心を溫めて、遂に卵の孵化する如くに信心の眼鼻が付きて靈に活きる信仰となり申候。

應身、人類に應同して此土に出で給る釋尊にして、釋尊は淨土に在す報身如來より身を分けて人間の身を以て我等に敎を垂れ給ふミオヤにて候。

此の三身は本一體にして私共の此の體を活かし下さるのは法身佛にして、我等の心靈を復活せしめて永遠に活ける佛として下さるのは報身佛にして、其の眞理を敎て下されしのは應身佛にて候。此の三身一を欠いでも私共は活きる事も助かる事も敎を得る事も出來ぬものにて候。此の三身即一の大ミオヤ卽ち南無阿彌陀佛にて候。

願くは世のすべての人々に大ミオヤの實在を知らせまほしく候。先は御禮かた〴〵如斯に御座候。　早々和南

百三十四

我國にて女子衆の最も必要なる裁縫の業を學ぶに、同じく友となることまた師となり、弟子となること空におばろげの緣にてはなかるべし。

三年乃至五年までも同窓の友となることはまことにしたしき中ながら、此世の習ひ終にはわかれ〳〵になるものなれば、同じくはあみだ經といふ經をみな〳〵の心に貫き通してこの世後の世まではなれぬ友となりしかば、この世ばかりにてはなく、師弟の緣も一層ふかくなりゆくべし。

この經を日々一卷なりともよみて心と心のうちに手に手をとりて淨土の樂しき池のほとり、たからの樹、寶の宮殿のところをめぐるおもひをなして心に掛おけば、たとへ身はのちのちわかれ〳〵になりても、むかし異口同音に御經をよみし、したはしき友だちをおもひ出し、後の世までの友どちなればいかばかりゆかしからむ。

只この肉體の上のみにしたしむは夢まぼろしのかりなれば、之に精神と精神をかぎりなき後の世までつなぐあみだ經の經をとほして、ふかきが上にふかき因緣をむすびおけば、それこそはまことの友といふぞかし。

糸をもつて縫ひつけて衣となるごとく、みな〳〵の心のあみだ經のいとにて縫ひつけて、この世のちの世まで心と心がわかれ〳〵にならぬやう縫とほして置よう。

これまた御師匠さまにまことあるとまことなきとの御師匠樣の針次第にて候。

アミダとは無量光とて心をてらす光り、かぎりなき光りとかぎりなき壽とはいふなり經とはそのいとなり。かぎりなき光のいとを心に貫きてかぎりなき壽と、かぎりなき樂しき國にいたる身となること最も幸のいたりならずや。この玉は人の心なり。彼の**アミダ**佛より出たる**アミダ**の經を釋尊がいとぐちをしめして、衆生の心にこの經をとほしてあるものはみな親友にして淨土の友で、通してなきものはみなおちこぼれ

て六道のまよひ子なり。

百三十五

この頃御身體はいかゞに候や。さていつぞやの傳道のこといかゞ決心候哉。人間忽〳〵として衆務を營なみて年命の日夜に去ることを覺らず。實にうかうかして居ると爲ることなしに日ばかり過ぎゆきてしまふ。牛のあゆみのよしおそくとも、その道につけばよしやゆる〳〵なりとも何分づゝか先へすゝむべきなり。兩人の決心いかゞ哉。なまじいなことではゆかぬ。身をミオヤにさゝげてしまふで、そうしてなんぎとこんなんを好んでする意志でなくつてはとても成功はむづかしい。身をミオヤにさゝげてしまへよ。

道につけばミオヤが必ず使ふて下さる。

たゞ〳〵ミオヤを力にして私をまじへずに、すべきのである。何にしても空しく日を暮すはあさまし。

キリスト教の女教師の仕ごとを見たまへよ。

衣食には決して慮るなかれ。兩公の御意見きかまほしく、當寺まで御一報。

百三十六

此程御書簡につき早速返書差出すべき處大に延引相成候。理哲庵の將來の件につき何分憂慮爲され候事は尤の事にて候。是については愚衲も計畫しつゝ有之候間、今に心配も減少し後には前途の光明も認めらるゝやうに成る事に候間今暫らく辛胞なされ候へ。

艱難困苦程精神を實地にみがくものは無之候。西哲の諺にも泣てめしを食た事なきものは天を語るに足らずと云はれ候。

辨榮が小金ケ原に初めてゆきし時は、野原にて新寺を立んとするにもまだ世にはなれず今こそ檀徒も有れ其頃ほひと云ふものは力にもるものとてはなし、そこで不動産もつけなければ寺に成らぬとの事、すべて自分の一心から成立て成功せしので、辨榮が今日の豐饒なる衆人の供養を受くるに至りしも其昔し曾て困苦して積みたる善本の然らしむる處にして一心の至る處必ず道は開け候。

前途に光は明かにあるなれども、御身の爲に態と見せぬやうにして如來さまから一心の魂を檢めされる御圖にてこれはさう思ふて辛胞しなされ。

（中略）

只現在の所得計りを得んとするは實は因果の道理としても叶はぬ事である。

人間は出來るかぎり陰德を積み功を積み德を累ねてこそ、身に德はついて來る。法癖ぼさつのたとへ身を苦毒の中に沈むとも忍んで終に悔ひじと云ふ處に眞の修行の値うちが有之候。たとひどうしても自ら積みし德計りが身につくものにて候。斯く申せ

ばとて決してかまはぬ譯ではなく必ず其中に光明が現はれ候故、今しばらく辛胞のほど。

至誠心を以て居れば人を信ずる樣に成るから人格を信じられゝば萬事は行はれ候。

故に自ら德をつむことを第一にせられたく候。それにしては大ミオヤの光明を仰ぐ外之なく候。

いまだ御目にかゝりしことはありませんが、御兩親さまによろしく御つたへ下され今日の天地のめぐみもこれが卽法身如來の御めぐみにて候ぞ。萬物こと〴〵く如來の顯現である。かたじけないではありませぬか。貴答

百三十七

われらがむねのほのほは如來のみめぐみのたきつせによりてすゞしきを覺ゆべし。われ等がこゝろのけがれはみむねのきよきによりてきよめらるべし。つねに浴せよみ

めぐみをいつも沐せよ、みむねに。

百三十八

欽啓梅雨中不勝の天氣がちに候處、いかゞくらし候哉、定めてなれぬ處不自由に候はむ。其不自由と困難とが頓て此土に極樂を實現する所以なり。

孔子聖人もいかん〳〵ともすることなきものは、我いかんともすること能はずと仰せられ候。

いかゞしたならば〳〵と是から働らくみちの爲に心配をすることより、其思惟こそやがて淨土を莊嚴する所以なり。五却思惟は、いかゞしたならば我も人も極樂にならんとの工夫なり。また釋尊六年の工夫も同じ。

さて自行のかたはら川口老人とはかりて光明歎德文を少年婦人等に敎へ試みてはいかゞ。弘法大師念佛口傳集に付て居候また如來の光も送り可申候。また其近村の老婆

楽にも光明文を教へ、また和讃を教へ試み下されたし。

百三十九

漸く梅雨も開晴し暑に近づき熱くも相成候節如何候や。來月中旬愚衲出張して何か事業の方法も授くべく候。何にしても不自由であらうなれどもそは修行の爲にて候讃歌傳道に是非音樂講習せざるべからず。夫につき東京にて夜分は傳道に從事し日中半日音樂の練習所へ通ふことにして練習せば大に便利ならんと存候。其方法委しくは面會の上、此方法實行せば自然と費用は傳道の方より出べく候まゝ地方に適當せる讃歌及譜も此から續々製する心算に候。何事にても精神一到何事不成、一心不亂に精進する時は必ず成功すべし。何にしても今より時代に相應せる新機軸を作り出すことにしあれば、たやすく行へんとはおもふまじく候。困難するほど其功も多きなり。

東京と地方に心光教會の會員が澤山出來候へば、教會所も隨つて盛んと成ゆくべく候。ほどなく學校例年の休業に相成候へば此時季を利用し、朝夕のすゞしき時に光明歎德文を教ゆることにせば大によろしからんと存じ候。

百四十

此頃の寒さいかゞくらし候哉。よりあつき信念だにあり候へばさむさは物のかずかはである。

世の中はます〳〵進めり。宗教家のみひとり百年昔のさまで居れば實に無用の長物に遇さるにいたる。

如來の光明を受て世に知らしむことの必要はます〳〵感じられ候。一心に冥想をこらして光明を發見すべし。

宗教家は世の燈火なり。ランプなり。ランプにして燈光なくば世に何の要かある。

燈せよ、かき立てよ、一心に。然る時は寒氣も春の如く暖ならん。

百四十一

ミオヤの大なるみめぐみに感謝し上る。昨今のあつさは殊に甚しく、二十年來のあつさとの事、名古屋にては九十六七度より百度にまで達し候。

此あつさの中香尼公には、いかゞ候哉。御自愛是望候。また其住居の處も不完全なれば殊に寒暑ともに困難ならんと存じ候。然れども何とか新事業を開拓するには是非艱難を經ざればならぬ事、只安樂に逸樂を貪りて一生空しく過す人は尊き人生を無視することに候。

其御身たちの今日の辛胞が頓て東の國にミオヤの光のあらはるゝ發端となることなれば、願はくばいさましく仕へまつらんことを望む。

百四十二

ア、愛たし、ミオヤのみ光は普ねく一切の時と處とに亘りて照さぬ隈だになかりけり。只信念の在る處にありてみ光は活動せり。世は闇黑なり。心のごとし。ア、女ぼさつよ。爾の心に常に慈悲の光を充しめよ。而して接する者をして悉く其光の火を點せしめよ。彼の天理教の信者を見よ。彼等は只肉の幸福を求めんが爲に於てだに已に是の如く活動せり。爾ら靈の永遠の幸福の爲に何ぞ夫れ不惜身命、聖旨に仕へざる。

香尼よ其病める處定めてやる瀨なく思ふならん。然ども之を耐へ能く忍べよ。我は其病に對しては大に同情に勝ざる處、只一ら己がすべての罪をざんげし過去に現在に身と語と意とに於て造りし處を悔ひ改めてミオヤにすがれよ。爾が至誠心あらば必ずミオヤのみ光に接觸すべし。光を被むる時は爾が魂にある處の罪と障とは悉く除き去りて身心清淨なるを得べし。身心清淨なるをうる時洗ひ去る如くに其病は治すべし。また彼の天理教の信者を見よ。彼等は若し身に病ある時は悉く此の病は心の塵埃なる煩惱より發すとの天理王を信念して煩惱の病治すれば自ら身の病も治せんと。

慈悲圓なるミオヤ何ぞ救はざるべきぞ。只須らく一心に信念を運ぶべし。

百四十三

大經に此土に於て一日一夜精進練行は淨土に於て百歳爲に勝れたりとは、實に深き意味ある事に候。錆刀を磨くに荒砥にかくればはやくさびが失るごとく、此土は兎角に荒砥が多い。殊に東國の佛教なき處に於て開拓を爲す事は容易なる業にあらず。されども今其うちには如來さまが佛教尼衆に相當の事業の道を開きて下さるが故に、いかなることも辛胞して貫徹せられんことを望む。

其地方にせめて十ケ處位の庵を以て道場とし一方には裁縫家政の傳習を成しまた家庭に佛教を養はしむる婦人を養成すること、また一定の信條を以て婦人を養ふ會を設くる事、關東の舊佛教の習慣なき處にて新たに能く養はゞ或は好果を得る哉と存候。たゞ當地方の如く舊習にして之を眞の佛教の如くと思はゞ佛教は世に益なきものと

して棄てらるゝなき哉と存候。

百四十四

此頃のあつさもこのあつさによりて、我日の本の民くさのいのちのね卽ち稻を實のらしむる大ミオヤの御惠のしからしむるものと信ずれば還て感謝に耐へず候。其のちはいかゞ候哉。

さて傳道者なるものは世界東西を問はず皆な敎の爲には千辛萬苦、身を犧牲にして數十年の困苦をやつして始めて其功果あらはれて、自分の理想が實現することが出來るのである。五劫に思をこらしたのも十二年の勤苦も只むかし話とおもふたならとても宗敎家にはなれぬ。いまにしたならば、いかにしたならば傳道の爲には五劫思惟の一方盡さねばならぬ。

今の處は如來さまから、兩人の爲に一心の志から大ミオヤのみちからを信賴する

精神をひきおこさせるために傳道の新らたなる光の道をあらはし下さらぬのである。願くば如來よ相當の仕ふる道を與へて下されと祈りなされよ。信州にて新らしき光ある傳道のために活動せるものは、海沼教隨尼一人なり。師は一切死亡者の事業をたゞ活ける有爲の士女を導きて今は有志の請により松代町に一の教會堂を設立して、それにて士女の信仰を養ふ。信州一國の活佛教は師一人なり。其他は大教會長を始め紫衣金襴をきらめかして、死體の垢甞である。活る人に宣教などは誤りにもしない。世の中は大分に活ける佛教を要求することに年增しである。

佛教の僧侶と神官ばかりは闇黑の中にねむりて居る。この如來光明會が奮起せざれば活た佛教はない。

百四十五

此ほどは井深重剛氏の發起にかゝる、三十三觀音の開眼いたし候。古川大野家へ十

九日伺候。此頃は老母公には大に快復被成候。さて此頃いかゞ候哉。

兼てより申居ように將來尼衆の務は女子教育の卽ち裁縫等を教授し自然に女子に佛教を注入し佛教を家庭に活用せしむる事は尤も適當と存候。

兼てはなしたる岐阜正道庵にて剃髮したる尼僧都合によれば其地にいたるべく、是は岐阜佐々木裁縫科にて學びたるものなれば直にも教授は出來ることゝ存候。

御兩人も其心がけのほどを望候、來月は歸鄕候。世話人衆へよろしく。

百四十六

此頃のあつさは中々嚴敷候折、いかゞに候哉、小林氏は昨今いかゞ、大切に靜養せられたし。

もはや其御地は稻刈にてせはしかるべしと存候。

また農繁中なれば今の事ではないが若し村にて裁縫教所を設くるに差當り教師を要

せば相當なる婦人有之候　間　何かのついでに其當路者にお話し置下されたし。

百四十七

無明の闇ふかき人々にいかにして大ミオヤの靈光を得させまほしく。

其後打絶へて訪ふことなくまことに大ミオヤに對して申わけなく候。此頃いかゞくらし居哉。已に植付もすみて苗もしげり候ならむ。然るに其御地のひと〳〵に靈なる種を播つけることをせず、此まゝにして置てはならぬと日々に思ながら申わけなく候。

今日は大風、別にさはりも御座なく候や、明日ゆくべきつもりの處、得度式ありて延引に相成候　皆樣によろしく願候。

百四十八

いかにあつくとも御恵みのあつさとおもへば只感謝の外無候。其の後いかゞ候哉。定めて經濟上のため普請多事のことゝ存候へどもいまに安心できる樣に心算有之候間あまりに慮からず業の爲に盡悴の程を希候。艱難困苦大なる程得る處の果實も大と云格言に本づき日々の作業悉く佛行として御つとめのほどを。

百四十九

此程の御葉書被見候。其のち御すこやかに被成候よし大慶此事に候、先月廿三日より當地に罷越候。

今回は昨冬より依賴され候谷汲觀世音新佛樣の御身體に華嚴經を書寫のためにて候。其故は舊本尊佛に華嚴經が書寫いたし有りしとの事、それに依り新佛にも同樣といたし度との事にて候。

此程尾張の國を出立の前より風邪に侵されおしてやつた爲に大にいためられ候、」

されども時間をさまたげられぬはこれも大ミオヤの思召と存候て深く感謝する事に候、實におもへばいつ何時に御引上の命令が賜はるかと存候へば、此拾果つる身體を何程たりとも餘計に御奉公させ度と存候へば、たとへ病氣の中でも勇氣がいやましし候。而して己が

大ミオヤより命ぜられたる宗教革命の準備に働らくことにつきては實に不惜身命にて候。

今に遠きか近きかはしらず、宗教の革命は必ず來るべき物とおもへば、うれしくも感じられて候。

八月越後の國に到りても到處に教育家に第三期の宗教を講習して聽かせ候。教育家は大に歡迎候。

伊勢の國にても四日市桑名到處教育家を集めて講演候。今日も大野村學校にて講演に趣き候。

さて何にしても頓て來るべき宗教革命の期までの仕事を只むだに働らきて居るか眞實其準備として働きて居るかの二つにて候。

卽ち光明に向ふての働らきか、闇に向つての仕事かにて候。前述の如く谷汲觀世音菩薩の方が仕舞となればまた岐阜縣の知事及高等官の婦人衆に講演是も昨年來の約束にて候。

昨年は知事始めすべての高等官に講演いたし候。

何れ本月中には繰合せ歸省いたすべく候。其砌委細申候先づは。

百五十

御兩尼の爲に將來の方針を定られん事を勸む。

進みゆく世に處してうか〳〵日を暮しあると竟には世の厄介物と成りて仕舞候。折角大ミオヤの命令を以て人間にまで生れ出し甲斐もなく、世の爲にも人の爲にも何ら

の功もなく、只生涯世の厄介物となりておはるは實に世の人の精神上に及ぼす功勞もなく只民の汗膏から造りし物で衣食して命を續きあるもそれに報うるの事なくては罪のみにして功德はない。食作法の文に功の多少を量り彼の來處を忖るとは斯ような義である。自分の佛道修行としての功はいかゞ、また他人にいかほど德をわけて居る、宗教家の職分たる法を全く信者に與へて居るかいかゞと、自分の今日作爲しあることを考へると、また自分で今日食ふ此の米は幾多の勞力より出來たのであることを能く考へて、自分も之を食ふほどの資格が有るか無いかと考へて見よとの思召の文である。

して見ると今日の僧には衣食することが出來るものが稀である。法を施さずして衣食するは生涯に負債を擔ふて餓鬼道に落ちゆくのである。

未來ではない、現在から意ある人から擯斥せられて居るのである。

けれども、これは僧たる者個人の罪ではない。佛教團體の習慣が崩れて仕舞て將來

の宗教團のまだ出來ぬからである。就て御兩尼に相談し度きことは、

實は關東には從來尼僧が無かつた。それで關東では尼僧は自身では左も思はぬが有識者より見れば無くとも困らぬ厄介物に過ぎぬように成つて居る。

けれども關西ではもう昔からの習慣で今更改革するは困難である。それにつき御身たちを關東に迎へたるは關東の清き空氣の中に尼僧の新らしき清き生活の中に新らしき宗教的活動、世の爲人の爲に大ミオヤの光を尼僧の身と働きとに依つて世に示したいと云ふ理想を以て迎へて試みたのである。けれども何にしてもまた時節が到らない若し關東に從來尼僧は居なかつたが初めて此地に移して後に關西の樣に世の厄介物が關東にまで出來たのは、辨榮の罪は一代二代ではないいつまでものこる譯である。就いて御身たちが作爲す事是が世の爲に爲るか世の害に成るかの二つに分るゝ分岐點である。御身たちにも實は責任が重いのである。一生懸命世の爲に竭して世間からも宗教家尼僧と云ものは實に世を救ふ權化であるといふほどに歡迎せられて到る處に要求

せらるゝ樣にならば、御身たちは實に其元祖である開山である。若し其反對にあらば矢張罪が多いわけである。そこで現在の處只御身たちが法を話しても左までに感じない、そは自己の心が大ミオヤの光明に充されて居ない、御慈悲に溢れて居ない。

けれども大ミオヤの御慈悲を自己の胸として今の處他に世の爲人の爲に成る道を講じてはいかゞ。

先づ差あたり女子教育の分たる實習科の裁縫教授を以て地方の女子を教養し、自然に如來の光明を其精神に及ぼす信仰の素養をつくるのが最もよいとおもふ。

就て三輪の江役場と能く交渉して實習科を學校と連絡して建立することにして御身たちが報酬にかゝはらず、宗教心より世の爲に竭すてふ眞心を表はしてしたならば、世の爲人の爲に竭すことに成る。若し其專心出來たならば、愚衲から役場員にも交渉いたそうと思ふ。

一、それには先づ自分たちの精神修養が第一である。

二、次に裁縫、自分らが六ヶ月講習になりと出て練習すること。

自分の精神修養を以て女子の精神を感化し裁縫を以て女子に授業し其中に於て信仰心を養ふが最も便宜と存候。

年月は過ぎやすし。早く志してせぬとつひに空しく日を送り何事も成事なしにおはる。是ほど殘念なことはない。世間でも尼僧といふものは何なる活動するものかまたは何にも役に立たぬ。有つても無くてもよいものであるか、と皆今御身たちの身の上に就て目をつけて居る。

こゝにまた一の相談がある。

御身たちの精神の內面は相談せずばわからぬ、辨榮の心と同じようかまたは反對であるかは。

此から御身たちの將來に立ての爲すことは關西の尼僧の模範となる事であるから能く熟考してほしい。

若し世の爲人の爲に文明の尼僧の模範的に身を粉にして働らくといふ意志ならば實に賴母しい。是非模範的に是から着々運ぶことにしてほしい。また只寺に引込んで居て寺に食ふ物があるから、其寺だけ守つてゆけば衣食には差支はないといふ樣な意志であらば、それは關西の昔の習慣ある處へゆけば氣樂にやれるから、其やうに道をつけることにいたした方がよいとおもふ。

而してまた骨折れてもやつてみると云人とかはりにしてもよい。

關東にはまだ舊習慣がないのであるから大事で、若し關西のやうな、習慣がついては取かへしのつかぬ、一層今のうちに止にした方がいかによろしいである。依て此は熟考してほしい。

只自分だけの考でやられては、のち〳〵までの恐れがあるからそれは相談にて、今のうちなら何れにでもなるから、能く考へて方針をきめてもらひたし。

何れも永遠におたすけ下さる

大ミオヤのみむねをおもふまゝに、書たることにて候。

百五十一

欽啓もはや秋の半ば、ことしは殊にはやく涼しく相成候。其後相變らず御つとめのよし大慶此事に候。

何は兎もあれ、月月は少しも休みなく過ゆき候まゝ貴重の時間を成べくば如來の光明のために盡すべきよう御こころがけのほど是のみ遙に心をかけて候、かま倉へ參りて日々光明宣傳の爲に心をつくして御奉公申上居候。（中略）

次に最も急務なるは自己の本務たる處の如來の光明宣傳に候。自らまだ光明獲得せずして他人に傳ふると云ふ理あることなし。自らの蠟燭にまだ火を點せずして其火を他の蠟燭に傳ふといふ理なければなり。先づねてもさめても念じてもまた念ずべきは光明名號なり、念々常に光明名號を憶念するときは、薫習久しうして、麝香

と共の同器の物に香氣が薫ずる如く、つねに如來の光明を念じて休まざれば頓て我心中に如來のいと清らけき靈しき光明は赫赫として照耀しぬべし。其清さその麗しさ其馥はしさ其悅ばしさ其聖さ何とも名狀すべからず。心廣く體肝かに斯る光明の常に心中に耀ける人を是人中の分陀利華と名づけ觀音勢至の友といふならめ。

二人の女ぼさつよ、一心に奮起せよ。已に開明の夜は明けたりうか〳〵朝寐してねぼけて居る時節ではない。長年寐てくらし、もはや自覺せざればならぬこと、一日も一時間も世のうやむやの事を思ひ言ひなどして、光明の時間を費すことなかれ。何をしながらでも一生懸命に光明を發見せんことにつとめられたし。いつまでも慈悲の獲得せられんことにはげめかし。

女の常として、よしなきことを語り空しく光の時間を徒らに捨るやうな愚を習ふなかれ。

其うちにまた第二の傳道員を募集して第三の教會所に、はたらくようなさんとす。

さて此間さる方より新聞の抜切を送られ之をみて愕然たり、いかなれば恁る狂言を演じたりけん。未だ其意を聞得ず候。　君には夫となしに書を差出置候。何でも家には無形に、人力に及ばざる物の祟りあるに相違なし。またそれを自覺せずしていつまでも因循にし置くは爲にならざれば何とかさとす決心に存候。御兩尼も其の生りようの爲に回向して玉はれかし、尙種々申述度も候へど、後日に讓り候。　早々頓首。

百五十二

田地を耕して、種を蒔き、芽出で、益發達し、のち花開き、後生の果結ぶ。

東國にて一人種を蒔ときは一人の我兄弟である。何でも一生懸命まきつけるが何より得策、光明歎德文をよむ人はまづ種を蒔たのである。一生懸命にまくは何よりであり候。

百五十三

人間に生れて一生の間に大ミオヤ様の御恵みを、また世の人々との相互の間に於てつとめ合ひ盡し合ふことを能くかへりみて、而してできうべき限り盡未來際迄の德を積むようにせねばならぬ。大おや様は現在にて天地萬物の設備を以て現に私共を活し下され、而してまた永遠にまで佛として活して下さる大なる聖意に對し日々にどの位まごころに大ミオヤ様にさゝげて盡し奉りてをるのだろうか。また自分の様な心と業とを以て思召に叶ふて居るだらうかと、毎日我身をかへりみてます〳〵すゝむやうにせねば第一自分の損である。

また世間の人は大ミオヤの手にて我等と同胞である。其同胞の人たちが耕し耘きりなどの稼業よりできたる食物や着物を着て住居して自分は其人々に對して靈魂の食物たる着物たる如來の御慈悲をどれほどわけつゝ、日々〳〵のつとめをして居るだろうと、

能々自分をかへりみて日々のつとめをよくせぬと折角佛門に入りてかへつて未來は牛馬と成りてそれを償はねばならぬ樣に相成候。殊に二人はわざ〳〵關東にまで來たりて、教の道の爲に辨榮は二人をよびたる譯なれば、それをよく〳〵かへりみてできうる限り教の爲にづくしてもらひ度候。

第一すべての有緣の人々に

大ミオヤの如來のましますことを自ら信じ他にも信ぜしむることを。其光明のなかにありがたく感謝しつゝ日ぐらしをするやうに光明禮拜式を女子會をもうけて教へてもらひ度事。

禮拜儀は現在より永遠にまでの大ミオヤに對す御禮にして、またおやさまの光明を被むりて永遠の命の光となる御法である。

此禮拜式の意が光明元祖の主義である。一ら一心に如來光明の宣傳に力を入れてほしい。

先づ第一に自分の精神が片時も如來を離れぬやうにせねばならぬ。

實に今日の日本人の精神は闇黑である。

如來の光明を以て是を救ふにあらざれば、外に道なく候。西淨寺を手に入れるにつきては前住小野孝道氏に前後二百何十圓米二斗、相場米百俵の金を以て引受た、今日なら千何百圓である。何のために左樣にしたかと云はゞ、其土地に如來の慈悲を宣傳いたしたい一心から實は本々運んだ譯にて、然し未だ其土地に如來の慈悲の宣傳が行はれてをらぬとすれば實は辨榮が全く如來樣の思召に叶はぬ事をしたのではなかつたかと思つて眞から涙が出て如來樣にサンゲして居る譯である。

尼僧と云ふ者は佛法の爲に成るものかどうかの試驗的に其寺にお呼び申した譯であるから、せめては眞實心に道の爲に盡して貰ひたい。教會所を利哲庵に立たる理由は一には西淨寺は不動產米利哲庵よりも多し。二には西淨寺を引受るに澤山辨榮より金を出したかような譯にて偏頗なき樣に利哲庵に移した譯にて候。

百五十四

如來より賜はるものの中に最も貴重なるものは時間に候。時間を貴みて能く用ひたるものは世に偉大の功を立つるものにて、時間を無駄に費すものは、世の厄介物となりて呼吸しながら墓内の人にて候。宗教家としては自己の本分たる生死事大、無常迅速の世に於て出離生死の道を明らめることにて、就中、我宗にては念佛三昧是最大事にて候。念佛三昧とは行住坐臥に佛と共に在るの理、口常に佛を稱へ身常に佛に仕へ意常に佛を念ずることなり。

自己が佛となるの外に佛道あることなし。

自己佛となるの捷徑は念佛三昧なり。若し念佛三昧を成じて自己佛となる時は見聞覺觸一として佛界ならざるなし。本より宇宙是れ人間界と定まりたるものにあらず。人間の業識をもて見れば人界なり。人の業識を本とせばたとへ十萬億土の西方に到る

もまた人界なり。みよ蠅はたとへ皇居の莊嚴極りなき宮に入るとも、蠅の爲には何も立派と云ふことはない。その如く人間業をもてせば何の處か人界ならざらん。若一心念佛して自己が彌陀と同化する時は佛界佛意として見聞覺觸として佛境界ならざる處なきに至らん。

此度往生し候事は人にはよらず、だれも〳〵申せば助ると計り心得て、世にたぐひなき惡人なりと雖ども、南無阿彌陀佛と唱ふれば、一念にても決定往生を遂げ候也。此分に別に心得候はゞ往生しそこなひ候。

『我長老となりて後、山居せしに毎日法華經を訓せり。一日不輕菩薩品を讀まんとて一坐餘緣を雜へず禮拜一行のみを修し、四衆の人天に向つては當得作佛と云ふて拜せし功德に依りて臨命終の時に至りて空中に於て過去の諸佛說き玉ふ妙法蓮華經の偈を聞きて六根淸淨となる。その事を得て二百萬億那由陀の奉命を增し人天の爲に此法華を說き玉ふ。と云ふ處に至りて頓に感發して流るゝ涙四五日も留らざりき』。

實に不輕菩薩は一生證果を得玉ふことは但だ禮拜一行のみにて餘緣には預らず。學道は常に謙卑の心を生じて一切恭敬より外の事はないぞ。大悲神兒貌相千心、是の中にも卑下心是を肝要とせり。趙列の曰く七歳の童子にても我にまさる者あらば師と學ばんと。

百五十五

如來樣の御力にて今日のあたらしき空氣と明らけき光りと、また日々のかてとを賜はりて總ての人々の壽を全うすることにもあれば忝なく御禮申上ますのです。

如來は大なる御力にて斯くすべてのものを活して被下しは只形の爲ばかりではなく心靈をきよらかに聖く靈化してよき働きの菩薩とならしめんためであります。

如來の御力にてかう活されてあることを知らず、只自分ばかりの力にていけるものと思ふて、今日の御恩をもかたじけなく御禮を申上るこゝろもなく、進んでは心靈の御たすけを求むる心もなく、闇の中に空しく過す人の淺ましさ。

世の中の人は如來の御恩を有がたいとも思はず罪を懺悔もせずして唯心を苦しめ淺ましき心ばかりで物を苦にし腹を立て、ねたみにくみ惡だくみ愚痴高慢など淺ましい如來の御光明の中に日を暮す身になれば、たましひが清らかになるから、心も安らかに有難く、此世も暮されて、亦清きたのしき御國へ行かるゝものを、さりとはしらぬ身ぞ哀れではありませぬか。

どうか一人なりとも此尊きみめぐみの中へ御導きなさるやう御心掛を願ひます。

百五十六

「儻し疾く苦海を超へ彼岸に到らんと欲するものは、諸〳〵の教法に於て心を留めて恒に修せよ。時光虛しく棄ざれば必ず佛祖の加被に預る。加被を被むる者は鎮へに功德を增長して業に究竟涅槃の大益を得る。豈に見ずや松に倚るの葛は上つて十尋に聳へ鳳に附の蚊虻は高く九空に翔る。

華嚴經に曰く、但能く佛法を說くの人に於て難遭の想を生せよ、自身に於ては病苦の想を生じ、善知識に於て醫王の想を生せよ、所說の法に於ては良藥の想を生じ、所修の法に於て除病の想を生ずべし。若し一句一偈未曾有の法を聞けば、三千界の中に滿る七寶及び釋梵轉輪王の位を得るに勝たりと。然るに當時の道俗放逸にして度なく徹夜睡眠を放にして精勤せず、猶日三竿に旭りて漸く起き情を肆にして喫茶喫飯酒を嗜み婬に耽り、或は噂し或は歌舞し、度世に馳せ名利を殉め懶慢にして晝寢し多歲終日虛しく送り、卒爾福つきて貧に逼り難に逢ひ顰蹙として臍をかみ遽に救濟を徼む。或はつとめずして徒に業因を恨み或はしばらく修すと雖ども、勇悍にあらずして驟廢し、佛敎知識を輕ず。あゝ悲哉。本願他力易行の宗風は斷證をからず、持戒を論せず、唯口稱の分齊にして直に無生の寶國に入ると雖ども、如し稱名なくんば曷んぞ生せんや。此を經に易往無人と說き、名無眼人名無耳人と演ぶ。善導大師經を引て衆を勸むる偈に曰く、煩惱深して底なく、生死の海ほとりなし。苦を渡

るの船未だ立せず、云何ぞ樂んで睡眠せん。勇猛につとめて精進し、心を攝して常に禪に在け。

如今人恒に顚倒の思に委ねて、自ら下根と稱し、或は病身と謂ひ、甚だ睡眠を嗜み朝寢晝眠して元を葆ひ神を毓ふと云ふ者多し。

然れども己が名利のため我嗜好する五欲の境のためには通宵瞑らず、又よしなきわざには寢食をもなほ忘るゝ程に、身心を費し、且つ出離の修行にのぞむ時は終に半時と雖とも食呻呿欠す。尋常退慢にして得益なきことを恨む。あゝ謬るかな。

善導大師毎に室に入り互跪して念佛したまふ。力竭るにあらざれば休たまはず時寒氷なりと雖ども亦往々汗を流したまふ。人のために淨土の法門を演說して三十餘年暫らくも睡臥したまはず。

古人の曰く 鷄既に鳴きて忠臣朝を待つ。世務已に爾り、矧や出離の行法をや。然るに世人勇進せざるは何ぞや。唯然り徒に霜露の端壽に著して無常を想ざるによる。

あゝ去り去りて來らざるは盛なる年。來り來て去ることなきは衰たる齡ひ、世間春來の夢、榮花何ぞ實ならん。

人身水上の泡、浮世誰か留らむ、光陰限あり、時人を待ず、生死無常にして、呼吸定めがたし、故に光德曰く休々として休す、早りに及修すること晴乾あへて去らず、直ちに雪の頭に淋く止む。待て、死緣無量なり、何の日何の時何なる緣何なる病にかあはん。奪精の猛鬼は貴賤を擇ばず、貧富を論せず、時日を待たず、遂に三塗に誘引して取苦無窮なるをや。

過去の流轉漫々として此の如し。未來の輪廻永々として亦爾ならん。如し此念を發すものは得益曷ぞ徒ならん。

故に惠心僧都の曰く、無常の念時々に起らば當に知るべし此人は成佛近きにあり。然るに或人若し無常を念ずるの心切なる時は恐くは五常の道廢しなんと此解あゝ頑愚なるかな。凡そ世人をごりに集し欲を縱にし、人を慢り己を亡することは、無常を

知らざるの謂なり。若し無常を念する時は則ち人を憐むの心最も切なり、豈に仁ならざらんや。若し無常を念ずる時は則ち道を守るの心最も切なり、豈義ならざらんや若し無常を念ずる時は我を捨て人を敬ふの心最も切なり、豈禮ならざらんや。若し無常を念ずる時は過を辨じ非を改むるの心最も切なり、豈智ならざらんや。若し無常を念ずる時信力堅固にして道念を失はず、豈に信ならざらんや。豈たゞ五常のみならんや、一切の行願無量の三昧此の念に依て成ぜずと云ふ事なきをや。」

百五十七

其のちは云何候哉

大ミオヤの光明のなかにます〳〵いさましく日々のつとめをつとめて居りなさるゝことならんと存候。其土地の人々が大ミオヤの在ますことをしらず日々に只自分勝手の淺間敷日ぐらしを爲すものあれば、いか成人にも緣ある人には、大ミオヤの思召

を世の人々にしらせるやうになさるやう是なん大悲報佛恩のつとめにて候。

百五十八

もはや本年もわづかに相成り定めて何かと御せはしなき事と存候。先日のお便によれば腫物にてなやみなされ候よし昨今云何に候哉、また蓮香事重病に候よし昨今いかゞ候哉、定めて困りたる事と存候。愚衲廿二日當山例年の別時念佛會にて歸山候。本年は當山にて越年候。

さて何は兎まれ人生の一大事は大ミオヤの光明を稱へて、はやく光明に接觸し、光明の生活に入り、現在を通して永遠の光明に入らんことこそねがはしく候。

百五十九

觀じ來れば光陰の道ゆく暫くも止むことなし、今日空く經過すれば再び復るなし。只須らく如來の光明の中に聖旨に隨ふべきつとめを以て自ら精進し、又世の人は目前の塵埃にくらまされて、心は闇黑の中にあり、希くは如來の光明を點じて光の生活たらしめんことをすゝめてほしく候。辨隆きみよ、初發心時が最も大事にて候。寢ても覺めても、如來大益を憶念し光明名號を唱へて、早く光明界中の人と更生せられん事を。自己の精神に如來の心光赫々としてとゞまりつゝあるやうならまほしく候。

百六十

手紙に依れば、先頃名古屋の方の事は、古川上人より何とも返事なき由、其のまゝして居れば世間の人は何に彼にと好き批評はせぬとの事、そは尤もの事にて候。折角佛門に入りて、一生懸命に修行もすべきはづの處、こゝと云ひ住處さへ定まり居らぬ

は、世間の人のよく云はぬ許りに止まらずして、遂には警察の注意を受ける樣になるから、一日も早く確と處を定めて行につく事にせられよ。埼玉の方は將來是非尼衆の模範團を作る事に致し度候間、矢張り埼玉に來ることが宜しいと思ふ。たゞ昨年大水害の爲に土地が大いに困難してゐるから直におもふ事が取りかゝることにならぬだけがあるのみ。然れども本年の米のとれるまでは、自分の金を出して爲る事にしてしようから、都合上早く來るもよろし。廿五靈場巡りの事は、若き女が獨りあるきはよくない。又、惡習慣がつくと、一生取まとまりし事もなく送りてしまう樣になる。都合上本年中位上、加納淨土院二人の老尼の爲に、介抱してやるは功德に成るから、するも宜からう。なれば早く行きて介抱してやるが宜からう。而して後は良き尼僧を見つけて、而して埼玉の方へ來るが宜ろし。一生の事業としては、矢張り團體に入りて裁縫教授の業をかねて、女子に信仰を養ふ事にするのが、一番よろしい。暫くの間として、淨土院へ行きて、手傳をやるがよろしい。本年中位にして、後の人を見つけて

埼玉の方へ來るがよろしいと思ふ。若き身にて、たゞ日々にとりとまりもなく流浪して居るは甚だよくない。世間の人に云はるゝ所ではない。自身の不爲であるから一日も早く取りつくがよろし。淨土院の方は其のやうに話が行かばすべし。さなくば埼玉へ來るべし。何れ早く處せられたし。餘は後の便りに。先は返事迄。蓮光寺御老尼へよろしく。

百六十一

承れば、貞善法尼は、七月二十三日　有爲の穢身を捨てゝ、彼の法性常樂の靈國に到りしとの事、實に老法尼は勇猛精進の行者三昧發得の稀有人、此の塵埃にまみれて汚れたる世の人にこそ知られねども深く三昧に入りし勝は即ち彌陀より外に知る人はなし。法尼は他の勸化の方にていまだ至らざりしも自分の證得せし事は實に日本は廣く自他宗に老尼衆數多あれども、法尼の如く、深く三昧の境に入りし者は實に

稀有なりし。

自身は已に充分に致りたる故に、蓮光寺にて草を取り、佛前に仕ふるも惡しからねど、よりは〳〵彼の報土に入りて、正しく大ミオヤの御許に致りて、諸上善人と俱に一所に會することの身になりしほどこそ、いかばかりか勝れしぞ。實にめでたき女菩薩たりし。

御身も自行を專らにする方は、彼の法尼に倣ひて、三昧發得を期せられたし。心には常に如來を觀察憶念し、口稱名を捨てず、然る時には身になす所いかなる事も皆是れ佛行なり。大ミオヤを常に忘れざりし哉。如來の光明中に心は安住しつゝある哉年老ひたる僧衆には及ぶ限りの力をつくして能く仕ふべし。是れ何よりの功德にて候何でも年よりは安心して悅ぶ樣に眞實心にせられたし。

十二光の中、清淨光は日々凡夫は見聞きするにつきて心をけがす。それを洗つて清く、潔くして下さるのが斯光である。清く潔く快活に、又歡喜の中、光充滿の

なかに日々を暮されたし。

若しこの光明の觀念を離るれば、自ら闇黑となる。夜分には十二光佛名を以て、禮拜を必ずつとむべし。若し緣なき人には、光明歎德章を讀ますべし。又時間ほど大切なものはなし、日々徒らに費すことなかれ。埼玉の方は、漸々に女子宗教的に進みゆく見込にて候。將來はこちらに來りて、光明の中にはこふ決心を以て、ます〳〵今日を大事に修行せられたし。

百六十二

大ミオヤの光のなかにいかに暮して居る哉と存じ候處、相變らず其身はすこやかにあるとの事、娑婆の習、浮世の浪風は是非もなし。兎もあれ埼玉の方もやゝ事もととなふて來べき運も向ひ候へば、東國へ來るべき準備を致し置いた方がよろしかるべく候。埼玉へ來り候ても隨分骨を折るつもりでなくてはならぬから其の覺悟で來られ

たし。（中略）又旅費はあるか、なければ送つてやる事にする。尤も途中を經驗の爲に三河の國位までは、庵室を宿に乞ふて歩きてみるもよろしいかと思ふ。而して名古屋一の宮、若し少し歩きて見るつもりなれば紹介狀を書いてやる。何にしても遠からず出立の用意せられたし。

百六十三

如來卽ち大おや樣は、十二の光明を以て、晝十二時夜十二時、暫くも休止し給ふことなく我等を照し給ふ。此の光明の時間を空しく過しなば、又再び歸らじ。この頃いかに過しなさるや其の後久しく便をきかず、今日々々を徒らに暮して一生得ることなしに終らば實に取かへしのならぬ事にて候。

かねて話し置き候埼玉縣下にて將來なさんとする婦人家庭に普及せんとの事業も、今は着々歩を進め候。就いては身を大ミオヤに奉りて、其の事に身を任す樣に出來

ますか。其の模樣が聞かまほしく候。この頃いかにして居り候哉。又こちらへ來られる運びは出來候哉。色々くはしく申し度く候へ共取敢へず。

百六十四

御書面披見候。其の御地方が目前に困る處を去るは、是佛道修行者の本意にあらざれば、今暫く辛抱してつとめらるゝ樣、又老尼の爲にはなるべく大事にして仕へる樣さうすれば自分も又老いて後に誰かに送り還して頂けるから、其のつもりにて埼玉の方は少し延引したとて、差仕へなき事なれば、何れに於てつとむるとも心だに　大ミオヤに仕へ奉る決心であれば、其のつとめたる事が皆菩薩の行にて候。大經に此土の一日一夜は淨土に於て百歲するに勝れたりとの事なれば、如何なる事でも、一時間は淨土の五年十年なれば、何でも辛抱出來ぬ事はなし如何なる困難でも忍ぶ決心だにあれば出來ぬ事はなし。又思ひかへれば苦も却つて樂になる。釋尊の如き應化の身でさ

へ、六年の苦行を經て、始めて光明發見し給へり。まして罪障深き身の此の罪深き身が、如何にして苦行なしに功つもりやうあらうはづはない。雪山に入りてばかりが修行でない。自身の心にかなはぬ處にありて、よくつとめさへすればつひには意にかなふ所となる。なぜなれば如何なる所にても　大ミオヤの光明遍照せざる處なきものなればなり、毎日十二時十二光の中に、一時間〳〵を光明中に暮さるゝ樣にせられかし。うか〳〵闇の中に暮すはまた取かへし難し。心にけがれ起らば、清淨光を念じて、淨めて頂き、苦惱煩悶起らば、歡喜光を念じて、法喜禪悅を感じ、智慧光にてます〳〵眞理を發見し、不斷光にて日々八億の念々光明中に進む樣に致され度し。

鐵も火に燒かれ、鎚に打たれゝばこそ名刀とはなる。苦難深かれば深き程、よき器としていたゞかる。尙後便に讓る。

百六十五

成るべく時間を大切にして、一心に念佛して、日々を空しく暮さぬ樣、又前途の大事を思ふて、身を持ちくづさぬ樣に、心がけられたし若し一度過まつ時は再び取返しがたし。

百六十六

誠に惟れば、日かげの駒の足早く、此ほどかすみと共に東京を立ちて西の築紫のかたにまゐり來し候へば、東海路より幾内にかけて山陽の道、西に東にいたる處、我日の本は桃に櫻にこきまぜて、錦を敷くかと恠しむばかりなる春もいつかは昔の事となりて、櫻散りはて春の名殘を告げられしより、もはや幾旬になりぬ。まことに思へばはかなき夢の浮世かな。さて此頃は我專修念佛の流の水の源なる鎮西築紫の善導

寺の内佛道場にありて日本續藏經のあるあり。之を開き讀みて、側ら聖影をうつしなどして日を送り、でうど北海の濱に釣をたれて、武王てふ魚をまつヂイさんと同じ樣なものである。こゝにありて思ふと七百年のむかし專修名號の種を播き置きて、今はます〳〵茂りて、日本國中にひろがりてはあるものゝ、日課を唱へ又木魚小鉢の聲はきこゑ、死者の葬儀などもあるもの、それでも又地上の極樂てふ淨土を此土に模したる會、卽ち集まりゐる老若は、各讃歌集や聖典を手にし、而して會の日に各喇嘸和雅の聲は宮商の樂に和して、高きに在す　大ミオヤの聖德を讃歎し、又教師が聖典の一節を講ずる時には集まる男女ともに聖典を披き、眞善美を開導するの教會は、願くば折角に元祖や二祖が蒔きをきし宗法の種に今は美しき花を開き、好き果を結ばしむる樣ねがはし。理想の教會は死しての後になくては叶はじといふはいかにも嘆はしく候。嘆きしものゝ再び顧みれば、これまでに茂りし木に花を咲かせ好き果を結ぶべき樣に、いまは徐々として、春風吹き來たりし頃ほひその培養をなすべき使命を

ミオヤに命ぜられて此土に來りしに非ずや。然るをなぜに我佛敎の敎師はそうせぬのであると、人事の樣に己を忘れ居るはいかならん。己をおいていまは如何にして此使命をはたし得べきぞと。心をいまはつくしより近況斯くの如し。

百六十七

其の後は如何候哉。先般の手紙に來月は加行にかゝり候との事隨喜の至りに存じ候。何れ愚衲も來月中旬には京都に行く事と思ひ居候。夫れ迄は途中にて結緣しながら至り候。若し加行中必要の件あらば、遠慮なく申し越さるべし。一生懸命に修行致して、是れより命のある限りは、佛法の爲に大ミオヤに身を献じて、働れん事をこそ希しけれ、已に御佛に献せし身なれば、たゞ聖旨にかなふ事になりさへすれば、御佛は必ず御使ひ下さる事に候。

百六十八

折角五十日も修行に參りながら、時間ばかり費し、何の功もなく過してはつまらない、何にも外の用事なく唯々一心に加行に參りし事なれば、一生懸命念佛して、三昧に入らなくてはならぬ。何と思ふて參りましたか。信仰は進みましたか。

百六十九

寒氣嚴しき折、御健康につとめられ候との事、大慶に存じ上げ候。自分事も昨年三月九州に入りてより、今日に至る迄、半日たりとも休息なく御つかへ申し上ぐる事も偏に是も大**ミオヤ**の御はからひと存じて、一日も悅ばざりし日はなく候。暖なる御慈悲の厚きには寒きをも覺へず候。承はれば、其の庵室の都合も有之候へば、かねて申居り候如く、埼玉の方へ行くもよかるべしと存候。自分も是非一度歸東

して處々の巡る所をすませ度と存候。何にしても四ケ月位は歸ることも出來ざる事と存候。當地も至る所に於て、教育家其他頭の大い方がしきりに宗教を求むる事に相成り候故、本は　大ミオヤの聖旨も此の罪深き總ての子供等を覺醒せしむる時の至りしかと、ひそかに悅び居候。折々尋ねにかゝる寄留屆の事は、其地の御都合に任せ候。埼玉の方も段々目的の事業も進みゆく時機が來る事と存じ候。それ故埼玉の方へ越すべき心組に致さるべく候。何にしても自分が歸東の上の方が、宜しくと存じ候。只々寢ても覺めても、忘るまじきは、　大ミオヤの御慈悲の願力に隨順する事にて候。

百七十

御身は又そんな事をして、樂隱居のひぐらしをしてはよくない。埼玉に居る一人は氣樂に暮す事を好む人であるから三河が宜しいと思ふ。まだ埼玉の方も本人には聞か

せぬけれども、是から紹介して見るのである。兎まれ此からは、尼僧だからとて、國民の宗教心を引起す爲に、一所懸命世に働かなくてはならぬ。そうせぬと佛法が消えてしまう。坊樣は自分の身ばかり愛して、如來の光明を以て國民の心を救ひ出さうと思ふてゐる人は至つて稀である。一所懸命やつて呉れ。

百七十一

此の程の御手紙の返事、それから〳〵へ參りて、大いに延引に相成候。御遠忌の寄附の事は承知致し候。それでも自分の主義は活きた法然上人の意志をつぎて、大ミオヤの光明によりて、今の世の中の心が闇黒に迷ふてゐる人々を明るい光明の中に入れて、而して肉にばかり活きて居て靈に死して居る人を心靈に復活させて、此の世から　大ミオヤの中に日暮しが出來る樣に致してやりたいのが目的である。明照大師なんて名前許りが立派でも、ぬけがらの御祭りは實は大嫌ひである。自分なんか手

ウ體は四大のかり物だけれども、心靈は今から　大ミオヤの大光明中に活かされて居るのであるから體がぬければ直に蓮華藏世界であるから、ぬけがらのあとはどうでもよいので、後の人もそんな馬鹿な事に騒がずして、活きた心靈の日ぐらしに導くことにつとめてくれゝばそれが滿足である。法然上人だつて御思召は同じ事である。御祭り騒ぎして居る馬鹿者の爲に、法然の德が　すると思へば、悲しんで御いでだらう。

百七十二

其後如何に候哉。何は免まれ世の中は悦びも悲しみもこれ夢のほどなれば、如何なる事もみな娑婆の習、種々の艱難困苦と戰ふて最後の勝利は如來の大慈悲光明の加はる人に之あり候。如何なる場合にも麗はしきをかへず、常に稱名せられん事を。夫れに就いても、世の人々が生れ難き人間界に生れ、遇ひ難き佛法に遇ふて、如來の光

明に遇ふ事を知らで、闇から闇に入る人のあはれさ。御身も佛門に入りし甲斐として常に如來の慈光を仰ぎ、常に受けつゝある光明を世の人に知らしめて、其の光明の生活に入る樣に如來の加被力を仰ぎ候へ。

百七十三

さて何事も免まれ角まれ　大ミオヤの光明の中に身も心も清められて、而して誠に心につまらぬくだらぬ事を思ふたり考へたりする程、つまらないくだらない事はない。其の心で、最も尊き最も大なる最靈なる至眞至善至美なる如來と及び法を念ふ方がいかにましか解らぬ。之を念佛念法念僧といふ。

百七十四

風の神を御宿し申せば、身も心もすぐれず候

大ミオヤの如來の分身を頭に宿し申し候はゞ身も心も共にありがたく、かたじけなく悦びと平和と滿足とにて暮され、無限の力と生命を與へて下さる。人生の一大事は宇宙唯一の　大ミオヤなる如來の在ます事を信じ、その大光明に依りて復活し、光明の中に日々に感謝の日暮しをする樣に皆さんにお勸めの程を願はしく候。

百七十五

此の程御賴み申したる襦袢御送附に相成り、正に落手候。度々御世話に成りかたじけなく存じ候。此頃は桃に櫻に咲き初めて、日本全國を通じて花の淨土と化し來つて、花の咲きし如くに、彌陀の慈悲の光に求淨庵の人々の心の花も開かまほしく候。法の子を持たるゝ女となりし事なれば、益々佛道增進の實行せられん事を願はしく候。先は御禮かた〴〵如是御座候。

百七十六

二人共に能く忍びて勉むれば、頓ては刀の錆もいくらかづゝ砥石にて磨かれて、除き去る樣になり申すべく候。仙人の砥石でさへ除ききれぬ其の錆なれば、若しも我儘に捨て置かば、どうなるか解らぬ、此頃光明主義いたる處に行はれ申し候が大垣は夜中にていつ夜が明けゆくか前途遼遠でないかと思はるゝ。せめて二人だけなりとも早く朝のしのゝめとなりて、光明中の日暮しになるやうに　大ミオヤに祈り居り候。

百七十七

秋も末頃と成り身にもあはれを知らるゝ今日此頃如何に暮し居候哉。先月下旬には暴風のため御地は非常に吹き荒み被害も甚だ多大なりしとの事如何ばかりかいたはしき事と察し候。

愚衲事其みぎりは豐後の國臼杵町にありてそこの地はあまり大風とも思はざりし。

然れども出水又流行病等の爲に大に物騷に候ひし。其の地に凡そ廿日ばかり、入るも出るもならずして孤島に島流しの樣な風にしてありし。漸く五日ばかりに此地に明日よりは豐前中津町に至りて、つゞきて豐前國と筑前國とにわたりて傳道致し候歸東は未だしかとわからざれども本年中は此地にて暮さねばならぬと存じ居候。何れ又申しのぶべく候。

次の　大ミオヤの詠度々讀み吟味して候へ。

あらためて祝ふ言葉もなかりけり
　南無阿彌陀佛の御名の外には
あらたまの光にみえてあけわたる
　年の祝に御名をとなへむ
あゝ目出た無量壽佛の御名をもて

ことぶく外に言の葉もなし
萬代と祝ふもしばしかぎりあれば
無量壽佛の御名ぞ目出度し

あらたまの年の祝に煩惱の
いぬもかはりて菩提とはなれ

大ミオヤは子らをおさめて泥洹の
みやこにすくふみむねなりけり

子をおもふミオヤの聖旨本よりも
かゝりあるとはかつて知らじな

大ミオヤの終局の目的にかなはずば

人の身うけし甲斐やあるべき
子をおもふミオヤのみむね知りたくば
なむあみだ佛のこゝろとはなれ

かの國をはるけきほどとおもひにき
ミオヤのみむね知らぬむかしは
常世なる無爲のみやこはおごそかに
眞善美妙のきはみなりけり
死してのちゆくみちにてはあらざらん
生死はなれし無爲のみやこは
親と子に心にへだてなき時は
いづ處も無爲のみやこなりけり

けはしくも忍ぶの山路越へぬれば
いと安らけき道にたつらめ

わだつみもくみつくすとのいさましき
心に得たるまにの玉かな

手も足も斷れてもなほ安らかに
忍びしみあとならはんものよ

火にやかれ鎚にうたれてくろがねも
世にめづらしきつるぎとはなる

ふし〴〵もまた骨々も解かれても
安く忍びてひじりとはなれ

みちのくの忍ぶの山路けはしくも
　　なるればやすくのぼり越ゆらん
すゑつひにかちどきあぐるものゝふは
　　忍ぶの鎧きればなりけり
眞心に此處もかしこもなかりけり
　　十方世界只一つにて
みほとけを念ふ心が目に見へば
　　さながらたふとき佛なるらん
三の身と分ちて御名は聞きしかど
　　たゞみひとりのミオヤなりけり
かぎりなき三世の佛のかず〳〵は

ひとりのミオヤの異名とはしれ
釋迦　藥師　地藏　彌勒といふものゝ
ひとりミオヤの異名とはしれ
世の中に眞理てふ　を尊むは
ミオヤのひかりあればなりけり
大ミオヤの聖旨しなくば世の中に
眞理てふ　法はあらじを

みひかりの照りわたる大ぞらを
たゞ大空とのみな思ひそ
はかなしやミオヤのみむね我が身にも
かゝると知らであだに暮しつ

何處にかひかりわたらぬくまやある
心して見よ御名を唱へて
內と外に充ちわたりたるみひかりを
己が心の奥に求めよ
大みむねにまかせぬる身のつとめをば
ミオヤのもとにすゝみゆくなり

六の度よろづの德もことゞく
みむねにまかすつとめなりけり
月も日も西にゆくへをのりとして
ならはゞやがて涅槃にぞ入る
明ぬれば今日もおほせのつとめをば

果さむものといさみすゝまむ
天地のよろづはなべて大ミオヤの
大みはからひになるにぞありける

賜の時のたからをいたづらに
費すひとの淺ましきかな
賜の時のたからをたからとし
つとめてこそはたからとるなれ
わが物と思へばあだに過すなれ
賜なりし此の命をば
天地のよろづの物を備へては
いのちを賜ふミオヤとぞしれ

かぎりなき備へによりて活かさるゝ
いのちとおもひあだにくらしそ

大ミオヤはいかなるみむねのましまして
われをいかすとさとりみよかし

人生てふまたなき此身うけながら
あだに暮すは愚ならずや

かぎりなき大恩寵に報はむと
おもふつとめのいさましきかな

心てふこの不可思議のものを見よ
まことのミオヤなからましかは

大ミオヤをミオヤとおもひまごゝろに
御名よぶひとのなつかしきかな
罪といふ罪多けれど大ミオヤに
そむくが罪の本にぞありけり
大ミオヤの聖旨にそむく心より
すべての罪はつくるなりけり
のちの世は聖旨のまゝにまかせてん
今日のつとめを我は果して
後の世と此世とへだてあればとて
たゞ大ミオヤのみひかりのなか
人はみなもと同胞といふものゝ

ミオヤをしられぬ人ぞ多かる
似せもの丶形ばかりを我と思ひ
まことの我をしる人もなし
かぎりなきいのちのおやともろともに
不生不滅のみやこにぞすむ
天地はよしわづかにもあらばあれ
我はミオヤと無量壽にして
なつかしき我同胞にわかちたし
とはに輝く此のみひかりを
たらちねの御手をはなれてみどり子の
成長なるべきみちやなからん

はてもなく六のちまたにさまよひき
ミオヤをたのむ心なきにぞ
いさみつゝ今日のつとめを果さなむ
我大ミオヤのおほせなりせば
大ミオヤのおほせのまゝに果すより
外になすべき事もなからむ
大ミオヤのみむねのまゝにまかせなば
つひには海に流れ入るなれ

百七十八

大なる御めぐみに依りて生き活ける菩提さつたのきみよ。ふかく慕ふべき又愛すべ

き、肉と血とを有する觀世音よ。愚衲は是まで如來のみひかりのかすかなるむさし下總のさびしき土地にて、福音を宣傳して御奉公つかへまつりて日を暮しました。

如來のみひかりが、四たりのぼさつの美き言の葉と光ある動作にあらはれつゝあるを久しく見聞する事の能はざるを恨みとして居りました。

ミオヤは必ず來月中には、愛と光とにみてるぼさつがたにめぐりあふ榮を與へ給ふならんとたのしみつゝ其の日を待ち詫びて候。昨年は二度まで、三河の國までまかり越し候へ共つひに四たりのぼさつのはらからに遇ふ事を得でのこり多く存じ候。

唯願はくば、活ける觀世音よ。三十三身應現自在なりと雖も、修羅、夜叉、羅刹等の嫉妬瞋恚等の相を以て、示現するよりは、常恒に柔和忍辱、光顏とはに麗しく內にみてるミオヤの慈悲を、一々の言語動作に現はして、自利利他兼濟をこそ請ふものなれ。

菩薩がたに對して述べんと欲する事は甚だ多しと雖も筆短かくして意を得ず。何れ

相好圓滿の月の御かほを拜む時を待ち候。四ばさつの君よ、きこしめせ。

百七十九

御めぐみの中に安らかに生息をうるすべてのひとの幸をよろこび、如來に感謝し奉る。

さて此ほどは法衣の贈與御こゝろづくしのほどかたじけなく謝し上候。

直さま御禮狀さし上べきの處一年一回の歸寺なれば實に一寸の暇もなく二日二夜の通夜ねぶくもあるし。

こゝは明治のはじめまでは野馬の牧場にて名にしおふ小金ヶ原なりして開墾地となりて人民のすむ處とはなりぬるも、ここかしこに松林のなかに煙りを見るばかりのさみしき處なれども、年に一度の法會には一府三縣の信者つどひて十日十夜報恩謝德のつとめをなすのである。左申しますればありがたき法會のやうなれども其實質に至つ

ては未だ〳〵少しも修養のなき男女が七分をしめて居るなればなか〳〵理想を現實するまではまだ道遠しと存じ候。それでも至誠會の青年男女が集まり夜も　通夜のつとめ經をよみ唱歌をうたひなどするを聞く時は將來の希望のために慰安を與へられ　候。下總の小金ヶ原の寺のつとめを了りてのちに新築成りし武藏の國なる三輪野江の教會堂へ信者のために誘はれていたりし。(是までは生家にて認めし)

こゝはこの地方に於ては風景のよい處であります。この地方は眞言宗の寺院ばかりにて至つて宗教のふるはぬ處なれども將來は必らず引おこるものと豫想せられ候。

かならず　如來さまはかくは處々御めぐみをかけ下さると存じ候。三輪の江教會の法會已りて舊里なる下ふさの國かつしかの郡手賀村わしのやの生家の菩提處へ參り、ていはつの師の十三回忌の法會をいとなみ、その夜は生家にて一泊し、つとへる人のために法話をいたしつゞきて夜を日につぎて少しの間もなく十二日には布瀨てふ處にて一泊し、十三日夕方東京に着し候。この一紙三ヶ處にてようやくしたゝめ候。

百八十

謹白久々御疎遠に打ち過ぎ候處最早春綠日を追て茂り常にはあたりいぶせき賤がとまやもさながら玉樓にまされる心地いたし候。實に憂き世の變遷は葉ずゑに結ぶ朝露よりも速かなり。此の物樣を見るにつけても常住不變の淨きみ國の更に慕はしく覺え今までは兎角に妄念の雲にさえられて御名を唱ふる時にだに淺ましとは存ながら日々御念佛申すに隨てなんだか知れぬありがたき心地いたし少々乍らも御稱名はげまれ候て彼此の三業相捨離する所なくならむかし。いざ是より進まなむとたがひに心の駒に鞭うち待り候。また二條院の我袖はの御解釋を拜讀してはまた時々、袖のひるまもなかりければあゝ淺ましきは實に私共の心根にこそあれ。今までは兎角に妄念の雲にさえられて御名を稱ふる時だに淺ましと存じ乍らいつも妄念の爲に敗戰となり候へ共御名の中の御蔭にて今は言葉に述べ難き物難さのもよふされて暫くのお念佛もい

と遺くはげまれ候　事いと嬉しく候。

百八十一

日かげの駒のあしなみはいかに疾きことぞ。もはやことしのなつも名殘りとなりて初秋を迎ふ日とはなりにけらし。よろづは變りゆくなかに、深く觀じぬれば、いつも變らぬものはたゞ如來さまの慈悲のみひかりのみに候。　さてこの殘られぬみひかりのなかに、吾がなつかしき所の佐屋のさとにいます聖子たちはます〳〵みむねのなかにきよきみちにすゝみゆきますらむとはるかにしたひ居り候。

一日三秋の思ひとや、軸をわかちてよりこのかた、一とせあまりもすぎにけらし。それよりこのかた、よのつねの御無音にのみ過しぬること、いかにも慚愧の至りにこそ。

月はゆき日はとゞまらず、我身もしたがつて移ろひぬることをおもへは、たゞ〳〵

慈悲のみひかりを世のひと〳〵に被らしめてよ、せめてまたなきさちをわかたむものをと存じ候へば、あせる心はとるものをもとりあへぬばかりにはやれども、いかゞせむ、まことに此のみめぐみの御手にかゝるものは少くして、たゞおのがいくぢなさをふかく　慈悲のみおやに御詫び申上げ候のみ。

つきて雲のそなたにあくがるゝ所のわが同胞たる佐屋の聖子たちはいかゞ在せ玉ふや。

あみだ佛にそむる心の色にいでば秋おもまたでもみぢなすうるはしさのほどはるかにしたはしく存じ候。

御院主さまにはます〳〵御すこやかにみひかりの中に有りがたき功を積らせ玉ふことゝ存じ上げ候。また御院内ひとしくことに四智圓明の月はさやかに照して愚痴弊垢の雲のさわりなく、いつもかはらぬ有明の空にかゞやきてゐまさむ月の面の見まほしく候。

却説この頃時代思想とでも申しますかはしらず、世の中はます〳〵たゞ物質の快樂のみ追求め隨分隨落のふちに沈みけるが、さりとてもまた一方には大分に宗教を求むるひともます〳〵すゝみて、佛教と云はず基督教と云はず大分に動出して來しことは事實にて候。今の世は其職分の何たるを問はず自分〳〵の天職のために一心不亂に力を盡す人がまことに神聖にして尊きことに候。またその人が世の同情の心をひくことが出來て全く成功することに候。

つきては皆さんよ吾同胞のきみたちよ。是よりは慈悲深き如來の我をすくひ下さるかたじけなさに報い奉らん爲に一生懸命に御仕へ申上げ候ことに致しましやうではありませんか。

愚衲本年は一月以來先づ埼玉縣の教會の附近よりはじめて多くは東京市と千葉と埼玉との間にまたがりて日をくらし候。本秋都合によりて三河の國よりまた御地へ出候ことに相成候。

佛教も耶蘇教も近年大分に活動し來り候につき氣候に催されて今より尼衆團體にも大擧傳道あらまほしく候。

時に久しく御伺ひ申上ぬでしたが本隨さまには當時御健康いかゞあらせられ候や久しきより聞かまほしく候ひし。

縁に心願すらく

如來の慈悲のみひかりを普ねく世に被らしめて苦を拔き樂を與へたきことは本よりなれども、ことに婦人は慈悲のみひかりによりて救を蒙らせまほしく、よりて埼玉縣下に三四の無住寺あり合せて五六十俵位の田地あり、これを合せて尼衆團をつくり婦人會を結び信仰堅固なる信仰ある婦人を護助者として尼僧二人位と合三人位にて會員の

方々をまはり婦人會必要なる讃歌を敎へ而して婦人の爲によきことを本によりてよみ聞かせるやうにして婦人に佛敎を養ひ家庭に行はるゝやうにいたし度き心組に候。いづれ本秋御地へ出候節に御地方と及び三河の國にて初めは先づ四五人の志深き尼衆によりて組織することに致し度く候。而してそれが成立するまでは信州に海沼敎隨てふなか〳〵堅固なる老尼が居り候間之をたのみていたしたならば然らんと存じ候若し成立候ときは尾張地方にて兩名位は願度事に候なほ種々申上度事多く候へ共またの時日を以て申上候。和南　讃誦要解送置候間御一統衆に可然樣御分配願上候。

百八十三

親緣　如來の絶對的なる恩寵卽ち大なる愛と衆生の如來に對する愛慕とのすべてに越えたる最親密なる愛なり。

親縁は内容の關係、卽ち感情上の關係なるが故に、感情なるものは心理活動中最も自己の中心的眞髓なるが故に感情に於て如來を愛するは、如來は全く吾ものなりとす。否我がものとするのみならず如來は全く眞實我である。眞我ともまた大我とも云ふべき眞の我を客體化して、歸依渴仰し、愛慕欽慕するが如くにまで思はるゝほど我と親密なるものである。

宗教的生命、靈の生活なるものは、如來の大愛が我の靈の生命と化し來るものならずや。如來の愛、我が血肉にまで融合せるに非ずや。然らずば、我如何にして、かく天地と同じき我、心靈としていけるもの是何ぞや。

譬へば日々の食糧と吸收せる酸素とが化合して我が血肉となるが如く、我が心靈は如來の愛を糧として、生活するにあらずや。世の中に何物か如來の恩寵と我が心靈の內容ほど親密なるものあらむ。我がこの肉體は外界より、攝取せる食物等により得たる要素を取り除く時は、我が血肉なるものはなきと同じ。

如來の恩寵を攝取たる聖靈の要素を離れて、我が靈の生命なるものあらじ。

我が心靈活けるは、如來の愛我に在りて活けるなり。斯る親密なる關係は常に如來の愛の光明に緣りて生活るものにして始めて知るのみ。

百八十四

衆生と如來とは同一法身を體とするが故に、理性に於ては一致すべき理あるも、內容實質に於ては、如來の聖靈的純潔なると、衆生の內容の煩惱罪惡なるといかにして親愛相和することを得べきぞとの疑問起らん。然れどもこの反對せる異性が却つて親愛して密接の關係を希望する性能の存在せることは、生物の異性が同性に對するよりも相愛の親密なる例に於ても知るべし。而して異性の相愛する所以は、肉體の生理的に規定せられてなり。生佛相愛の性能は靈的規定の天則といふも不可ならざるべし。

異性相愛は肉の生理的親和の欲なり衝動なり所謂戀愛なるものなり。

すべて生物は異性の欲のためには、全力をつくして求むるが如し。然れども人は肉の生活より高等なる心靈的生活に於ても、心靈は衆生に對する異性なる如來の靈應に感接せんとの愛は、即ち靈的衝動、靈的憧憬、生は惡、佛は靈、反對なる異性にして相愛親和の性能存在せり。靈の戀愛なるものは、如來の愛の化現たる靈と交感孚應してなすものなり。

孔子曰はずや、賢を賢とし色に易へよと。言ふこゝろは好色を好むほど賢者を愛慕せしならば己もまた賢者たるべしとの心なり。異性を戀愛するほどに靈を戀愛するならば必ず靈應に感觸することを得べし。

異性に對する愛のためには全心をつくせる如くに思はる。詩に窈窕たる淑女寤寐之を思て得ず展轉反側すと。靈的戀愛もまた然らざるべからず。宗祖の

かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をも忘れやはする

無限の生命無限の靈福を獲得すべき靈の生命に入らんが爲に、何ぞいのちを惜しむべき。世の中には、肉の有限なる假の身の色情に於てさへかくの如くなるをや。

愛戀欽慕の情ふかく、至心至誠の意かたからば、聖靈交感などか疑はん。法華經に衆生己に信伏し、戀慕を懷いて而も渴仰の心を生じ、一心に佛を見んと欲して、自から身命を惜まざれば、佛その身を現はして爲に說法すと。

聞說く、生物進化の論に、すべての生物が進化の理法には自然陶汰なるありまた雌雄陶汰なるありて發達す。動物にしてもまた植物にしても、雄性なるものは雌の愛を購はんが爲に身體の美なるもの發達し、その次第に進化したる結果として非常に美を呈するあり。例へば孔雀の尾の如し。また鶯の鳴聲の如し。かく進化したる原因は異性の愛を要求する自然の陶汰によると。殊に人類に至つて、最も發達したるものと云ふべし。雌雄陶汰の愛を求むるそれと同じく、神人の靈的關係に於ても、亦同じき

例と見るべし。

宗教的關係の容體なる神の表相は最勝、最美、一切に超絶せる妙相を具備して莊嚴して而も衆生の愛慕を求むるが如し。

如來妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬禮。

如來色無盡、知慧亦復然、一切法常住、是故我歸依。

如來の勝應身は、八萬の相好光明普く、十方を照して無上の愛を以て衆生の信愛を照見す。

心靈的神人交感の相愛親和の理に於て、淨穢相反すと雖も、異性相愛の內容的形式に於て酷似するに非ずや。

一切諸佛は同一の如來法身を體とし、その內容に於ても全然一致したるものとせば同氣相求め佛陀は佛陀を親愛すべきものを、然らずして却つて反對なる凡夫罪惡汚濁の生類を求めて、親和愛念するの觀あるは奇ならずや。

宗教的感情が神の靈象を憧憬し愛戀して、之と交感を請求するその最も甚しきは宗教的天才また宗教的要素の豐富なる感情に於て殊に然りとす。

百八十五

大ミオヤの光明裡に御院内益々御精進に御つとめなされ候事有難き事に候。

良く惟んみれば、世の中の事は夢幻の程、有や無やの萬の樣、生者必滅は娑婆の習會者定離は人界の掟、何人も免れぬ事ながら、嚮に辯周尼の西逝あり、又御院主智隨法尼の御遷化あり。我等及び皆樣の爲にも世は無常なり須臾も油斷してはならぬ、專らに各自に與へられたる生命の時間を　大ミオヤの光明の中に聖意にかなふつとめをなして、空しく送り徒らに暮してはならぬといふ事を自覺させんが爲に、教訓なされしものと信ずる時は、實に御兩尼の皆樣に對する御說法は實に深刻なる感じある事と存じ候。

願はくば早く身はこゝにありながら心は　大ミオヤの光明のなかに意義ある價値ある生活に入るべきやうに御心がけなされ候事を望ましく候。御兩尼樣の御法名並に御回向料御贈り下され、折角の御好意施本傳道資のうちに備へ、光明宣傳の料にいたし候。御芳志の程奉多謝候。宗祖の皮隨御送り申上候　間御讀みなされて宗祖の靈的內容を味ひ御信念御進なされん樣に御進め申候。

先は御返事かた〴〵。

百八十六

聖きみひかりの裡に魔事なく生息を得るお互の幸を賀し、大なる聖寵に感謝奉り候。

さて先頃は深き御擁護により、病軀をだうにかつかひ奉ることを得しは、全く活るぼさつがたの御かげかたじけなふ御禮申上候。

百八十七

御手紙拝見仕り御病氣の御事、どうぞ〳〵御自重祈上候。

體はやめるも心靈は如來の御めぐみによりて安かれよ。愚衲は廿四日まで當院、委細は鏡月さんより。御むねによりて、むねのほのうも自らきえて、たきつせにうたるゝごとくに、すゞしくいさぎよく。

百八十八

おもへばおもふほどミオヤの御めぐみを感じられて候。この病人をミオヤにましませばこそやすむことなしにおつかいくださることのかたじけなさよ。

百八十九

理想のぼさつとして生活せるもの、遠大なるのぞみなしに日をくらすべからず、望みなしにあるものは己に心靈死したるものなり。いかなる望かこれなる。聖國の世つぎならんには、その資格をそなへざるべからず。資格とは何ぞや聖旨の如くきよらかならしむるなり。**ミオヤ**にあらせ玉ふ聖德を與へらるゝ爲に望をおこすなり。すべての眞理をさとらんと心靈をみがくなり。四面玲瓏とかゞやくように心情を如來と融合するなり。また神聖なるみむねをあらはすようにはたらくなり。正義のみむねをあらはすようにはたらくなり。世つぎといふことを忘れざるなり。無上の慾望を以て、安んぜざるなり足れりとせざるなり。一日もむだに日をくらさざるなり。一寸の光陰を千金なりとおしむなり。時間を費すことをせぬなり。

欲望なき人は貴重なる時間を浪費するなり。一日は極樂の百歲なることを思はざるなり。欲望なき人は如來が常に與へつゝある無價の寶珠をうけざるなり。

百九十

拜啓過日御投じの御書翰拜見仕り本一日より當市へ來り候。三河佛敎四恩會員が陸軍病院慰問のために同伴明日三河の刈谷の方へ出でゝ三十ヶ處十日計り、それを仕舞つて昇堂仕候。

主我なる心をすてゝ、常に如來の靈應やどり玉ふ時は、いかにうるはしくいかにきよき心ならん。一念佛にあれば一念の佛。念々佛をやどせば念々の佛。

本月二十日頃に行また重ねて申上候。この頃はこゝろざしある三四の人が病院に五千有餘の負傷兵即ち國の爲に身を粉にして活動せしますらをが外出も出來ず呻吟せしをだうかしてミオヤのみめぐみの聲によりてなぐさめ、一には傳道の種子となれかし且つは病床をなぐさめる意に候。

百九十一

佐屋の里にありて聖きみむねを奉ずる友の道業増進せられんことを聖き名によりて祈りたてまつる。經にぼつさは新月の如く衆のために愛翫せらるゝと。あなたがたの日々に月々に心靈の光りはいやましてかならず一日より次第に満月に向ふてすゝむことは信じて疑ふ餘地なし。くさ〴〵の事を申述べんよりは、たゞ〳〵ひとへにあなたがたのます〳〵すゝむことを聖意によりていのり上候。

四智圓明の月はとこしなへに清淨靈如の天に照耀せり。

願くばきよき友がたよ、それこれ申上んよりは、たゞ願ふところはあなたがたの心靈を是の畫の如くあらんことを。

百九十二

聖きみむねによりて、新たに生れ更りし聖き御子たる四たりの菩提薩埵たちにまで

まをす。吾いと愛する所の聖き御子たちよ、したはしきさぼちたちよ。われはそのこゝろざしのうるはしき、その童はのみさをのやさしきを愛してやまざるなり。

きみたちよ。觀世音菩薩をみたまへ。かのぼさつのいと妙なるみすがたは、四八の相こまやかにうるはしさ、玲瓏たる月雲のひまよりあらはれたるよりは、はるかにすぐれたり。青蓮の眦、丹果の唇、未敷蓮華をとりて巳にすゝみゆきし御足をどゝめさせ給ひしうしろより、たれかその御名をよぶとふりかへりて、丹果の唇を動かし、笑を含ませ給ひていと妙なる御聲にて、アヽ吾愛するところのいもたちよ、とのたまひしにはあらぬかと思ふ樣にうつし出したる觀世音菩薩の御すがたを拜むときは、きみたちは、いかゞに思ひなさるかしらねど、わたくしはそのうるはしき菩薩の御すがたを拜むとすぐに聯想して心にうかび出るものは、四たりのいける菩薩たちにてぞある。

そも〳〵觀世音菩薩とは、いかなる御方にてましますぞといふに、そは肉によりて

けがされたる心が、いと聖きミオヤの聖寵に依りて、生れ更りしミタマにてあり。かの菩薩の御ぐしに尊きミオヤを常にいたゞきてましますはそも何の故ぞ、卽ちかの心殿に如來ましましで離れざるところの心のすがたにてぞある。

心殿に聖きみむねによりて、靈ます時は、聖きみひかりによりて、六の根いさぎよく玉の玲瓏たるごとくにして、歡喜の光にこゝろのそといと平和にして、春のよき日ににほふ山櫻のうるはしきが如くに、智慧と慈悲とは日月ならび照す如くにます心のすがたこそ、まさしく觀世音菩薩とは名づけ奉りしなれ。

身を千萬億に分たせ給ふ觀世音菩薩にてましませば、いづれの處にか出現せざるべき。聖きみむねやどるところ卽ち觀世音ならざるはなし。恩寵の被むるものとして、菩薩ならざるはなかるべし。

新たに生れ更りし聖き心よ。聖むねのやどらせ給ふこころの活ける觀世音まかさつたたちよ。わたくしは一日も疾く四八の相うるはしきを見まくほしさにたえぬなり。

いと戀しきところのまかさつたちよ。われはみちのちかきところなれど、たにぐみの木像の菩ぢさたに思のなやみをはこぶことなけれども、國を異にしみちをへだつとも活ける菩薩のもとには日々に思ひの　いくたびのはこばぬことぞなかりし。水月感應のたとへ、我信といふべきか、たゞしは愛といふべきか、心の水みちぬる時は、四たりの菩薩の月の面、宛然としてやどれるなり。

たゞ願はくは、いける觀世音よ。まかさつよ。きみたちはわたくしにたいする處のうるはしさは、八面玲瓏と實に愛づべき處の心のすがたは、表裏に暢るが如く、明鏡にあらはるゝごとくに、わたくしは感せらるゝ。

若し世に觀世音といふものましまさば、四たりの菩薩即ち是ならんかと思はるゝなり。きみたちのうるはしき月の心のすがたは、大慈悲といはんか將た愛と名けんか。いとうるはしきをもて、わたくしの心の水に感應して、いかゞに見やうとも、菩薩といふべき外なかりけると思ふ。きみたちにしていかなる怨執といふべき人に對しても、

わたくしに對すると少しも異なることなきにいたらば、何人も君たちを見ることみな〳〵活ける菩薩として仰がざるなきにいたるべし。曾て聞き給ひしならん。釋尊は愛するヤソタラ、ラゴラと、また提婆達多とを同じ愛の眼を以て見たまひしといふ事をたとい觀音の三十三身應現自在なりと雖も、龍夜叉、あしゆら、けんだつば等の心相をもて應現する事勿れ。

あゝ戀しき四菩薩よ。われは愛の手をもて菩薩に接する日を待つの甚だ遠きにたへず。われは望の手をのべて一日もはやく四八の相を見ん事を欲するなり。

妒雨は菩薩の間を障て望の手をいたましむ。聖き友なる菩薩たちよ。わたくしは大なる恩寵のミオオに對して、深く感謝して止まぬなり。いかにとなればミオヤはイナビカリの如くに靈光を放ちて、四たりの菩薩を、やみの中より聖き道を示して、わたくしのすゝみゆかんとするみちのよきともとして與へたまへばなり。ぼさつてふ私をすて玉ふ勿れ。眞善美の聖國の實現する終局目的に至るまで同じく道の友として愛

の手をはなち玉ふ勿れよ。いかに大なる聖き道なればとて朋なければならされば なり。

六の道にさまよふことなかれ、只一すじの白き道のみありて、聖きみくにに達すべきみちなればなり。

此餘は遠からざるうちに大なるめぐみのミオヤは、かたちによりて愛の手をとることを得るの幸を與へ給ふものと信じて、之に對して望の手をのべてたしかに之をうることゝ信じて　ミオヤにまかせ奉る。

吾が愛するところの四たりの菩薩にまで。

百九十三

錦地は此頃共進會にて數多の觀覽者の雜沓極まることならんと察し上候。物産の共進會によりて益々進歩發達することはげに歡ばしきことに候。尙進んで物産の一大主人公なる精神の共進會を催ふして心靈の眞、善、美の發展を期し心光赫耀とし

て人類をして極樂の聖衆たらしめば如何に快ならむ。其日の早晩來たらんことを大ミオヤに祈り候。

一昨日夕方降る雨に罪の汚を滌ぎて此靈山にのぼり觀音大悲の御前にて祈り候ことは、

大ミオヤの長子たるボサツなれば、吾人の御兄さまなり。願くは御兄さまよ、此地の同胞らをして　大ミオヤの御むねに背きたる罪を悔ひあらためて靈き光によりてきよき人となるようにみちびき玉へ。と。

御送附の如來の光の唱歌をうたふて　大ミオヤの靈德をたゝへ玉へ。三部聖典七部御呈送候間宜しきに御頒ちをねがふ。

百九十四

大ミオヤの御慈悲とまたきよき同胞なるアナタ方のいと溫かなる御なさけに覆はれて

送られし其あたゝかさは名にしおふ信濃に來りてもいま尙寒きを覺えざるまでに感じられ、かたじけなさ、煙たちのぼる淺間のすがたに向ふて感謝の意禁じがたきに、たゞ大ミオヤの聖き名を稱えて高きたかさきに在す聖き同胞に謝しまつり候。

百九十五

我らも完德の鑑たる世尊に倣ひていかなる場合にも麗はしき色を替へざることをちかひ奉つる。

過日來の御好意を謝候。

ます〳〵御惠みによりて向上し給はんことを至禱。

百九十六

ひたすら御名を唱ふれば、いつしか心もすみぬべし。衆生心水澄みぬれば佛日のか

げやどるなり。

百九十七

「子らは闇にさまよひて生死のうみに浮き沈む。親の心の安からずおもひをいまはつくしがた」當地將來傳道上の計畫のために今尙當寺（九州善導寺）に罷り在り候。

百九十八

天地萬物は悉く法身如來の法則によりて成りしものと信ずれば到る處に山水の美に對し　大ミオヤの妙用不測なる恁る山の奥にも遺す隈なき聖意のほどを讃歎せざるを得ざることに候。

百九十九

あみだ佛に染むる心の色に出でば秋の梢のたぐひならまし、とは聖法然の道詠にて候。此頃の野に山に紅に麗はしきを呈す如くに心の大ミオヤの光明に靈化せらるゝときは身は此土に在りながら神は淨土にすみあそぶといふように相成申すべく候。

二百

うか〳〵して居るうちに光陰はヅン〳〵と先に〳〵と走りて行くので、世の闇にさまよふ人達に安き大ミオヤの御惠みを及ぼしたいとあせつても、なか〳〵にすゝまぬのには痛まざるを得ないわけであります。

二百一

春の溫かなる氣候も徐々と歩んで來るように想はれる。程なく和なる氣に喚起され

て櫻の花も綻び出すだらうと存じられます。いまに日本國中花の都になるのであります。いかに愛らるゝ櫻の花も、咲出さなくては花なき木もかはつた事はありませぬ。人間でも弘法の歌のように

空海が心のうちに咲く花は
みだより外に知る人はなし

如來の慈光に催ふされて信仰の花が開かざればほんとうに麗はしき心のすがたは見ることが出來ませぬ。どなたでも心靈は有りながら花を咲かせずして捨ておくのは本とうに惜しいものと存じます。

二百二

時間は休日なしにづん〳〵と立てゆく。人生の行路しつかと如來大悲の御手にすがりて居らぬとだん〳〵闇の方にといそしみて、三途の火坑に落ちてしまふことに成る

ことを思へば、ナム〳〵と　大ミオヤの御手に捕まつて明き方にすゝむことにいたしませう。

二百三

欽復、時既に霖は過ぎて二旬、然るに尙此頃の天候、九重の雲深き天津日の蝕に入らせ給へば六千萬の黎民は憂の霧にこめられて爲すべきをだに覺ほへぬ民の心は蒼天も之を感じけむにや、何日霽るべくやもはかられぬけふの天あい、西の筑紫路のしかあるがごとくに靑毛むしろを布ける上づ毛の方もまた同じことならんと察し候。

承はれば其後は引續き御健かに公務にいそしみ給ふとの御事まことに幸甚に存じ候。御家にありては皆樣擧つて　大ミオヤの聖き旨を畏こみて日々の命のつとめをいさみすゝみてつとめなされ給ふこと何事か之に如んとはるかに存上候。愚衲事淨土宗鎭西流の根本地なる正宗國師の開かせ給ふ內佛道場に在りて一百十日をとぢこもり

て、何を爲しつゝ長き日をわたりしかは知らず、たゞ月日をかぞへ見れば已に左ばかりに日を暮したることに驚きぬ。一秒間たりとも　大ミオヤより賜はりたる貴重の物たるを兼ねて感じつゝあれども、或は唐らに消はせぬかと怖るゝの感なきにあらず。

さてしも豫てより當七月は御歸省被成るゝことゝ存候。御面會を樂しみたる處御都合により暫く延引被成候由遺憾に存候へども、然しながら御因緣てふものは何れに成ゆくかは自ら豫知の出來ぬ世の習なれば或は御延期に被成候方御面會に都合宜敷き哉は何にしても其日にならざれば分らぬことに候。形は西と東と隔てしものゝ心は常に獨の大ミオヤの心光のなかに清き同胞の御因緣紙一重だにへだてやある可きぞ。

廿日より善導寺の一室より出でゝ此地に來り今日にて一週間傳道を試み居候。當地は舊風の宗教的習慣は關東のそれに比れば進みありしことにて候。されども當に閉かむとする、即ち內務が要求するやうな、辨榮が唱導せんとするやうな、教育と關聯し能ふべきやうな事は皆無にて候。當地の信仰は退きては何處の觀音は安產の能があり

何寺の藥師は眼病に妙であるてふ風なことなれば、天理教とか金光教とかは尙一層繁昌にて候。進んで三分一位の老男女の信仰は現世はもはや望なきもの彌陀の願力に乘じて未來に於て初めて幸福は獲らるゝものとの信仰、まづ信仰に入りしものは此二にて其他は唯食ふ爲に活て居る主義の人物ばかりにて候。

此程福岡の公會堂にて前の醫大學校長などの發起によりて石龍子てふ性相學の首唱者が一週間講習を開きたりとの事、其講話の結論に、世界の文明が進み行くに隨て三階に分ち天性と理性と靈性の時代とし、初め天性の時代は人間も他の動物と同じ樣に食て己を養ふと子を造り相續者を養ふだけが目的たる時代で今日の物質の文明は唯高等な肉の生活を爲すを目的として進んだ其頂點である。次に理性の時代に今から入らんと爲る。理性の時代には人間と動物とは精神の進化の度を異にして人生の眞理を悟つて生活のできる他の動物と同じく營養と生殖是人間の能ではなく理性の光で人生を照し人は何の爲に食ひ何の爲に活きるか此理性はすべての人が發達すれば、物の理は

分つて來たから子を養ふにも因果律に照して善くも惡くも或度までは自分の理想の樣に子を造ることが出來うると。すべてがさうなると人の善惡も一見して彼はかやうな性格であるから信ずべしとか、また信ずべからずと分るやうになれば、自然惡人は減じて來る。其よりも漸次に進んで靈性の開發する時代は人の精神の頂上が發展し此世ながら淨土の人となりて、永遠の生命に入る人が澤山出來るやうになる。抑々此地球の人類の頂點に進まば靈性の時代となる。現今の分にては靈性開發したる人は千萬人に一人のみ。現在は唯立派に動物生活を營む人間にて充塞しあるといふやうな講習をした。醫學社會にても餘ほど耳を傾けて聞きしとのこと。その學は西洋にても漸次に行はれ行くとのこと。

何れにしても現在の人間は何の爲に人間に生れ來りし哉も自覺せず、唯立派に動物の生活を爲し、遂には滿足てふ思想のみが的なるには實に悲しむべきにて候。希くは吾愛する淸き友の衆は世に先だちて靈性の生活に入らむことを望む。願くは宜敷お

傳あらむことを、愚衲は當二十日より善導寺を出でゝ先づ福岡市にて一週間、今日より甘木町、引續きて九地の要處なる市町にて傳道を試みる心算にて候。時候のあつきより宗教の爲に報恩の爲に盡す精神が一層强からば、あつさを生ずべきいはれなし。傳道熱誠の程度をはかるには、よき試檢の氣候にて候。自己の熱心は百度已下に降るやうな日がありしならば九十五度の熱さは生ずるかも知らじ、若し常に百度已上にあらば此頃の氣候は凉風徐ろに傳道に好時期に候。

甘木町に出立にのぞみ亂筆失禮なれど御仁恕を乞ふ。

二百四

過日は久方ぶりにて御目にかゝり悅ばしく存候。實は三日に參上するつもりでありましたら、眞鍋中將が病氣にて赤十字社病院に入院ありて是非訪問せねばならず、それへ訪問いたしたる處、中將も大いに悅び實は家内にあなたの居處を尋ねて是非請

じて來るやうに申して居た處と云ふのであるやうな事、病氣といふものゝ疼痛もなしそれでも寢臺から他へ出ることが出來ぬのであるから幸ひに是非聞かして呉れといふので、光明禮拜式を順々に話すつもりに成て、一晩おき位に病院に話にゆくことに成て大に御本人も佛教の妙味を味ふて御座います。

さて高崎の信者衆にも久しく御目にかゝらず、一日もはやくと存候。殊に櫻井家こと深く意にかゝりしも一には眞鍋中將に對し、また會堂の本尊さまも出來あがらぬ間は遠方へ出て呉れるなとの土屋氏の意見も有之少しく延引相成候。本尊さまも內の本尊と巡教の本尊と二つ出來ることにいたし候。

おもへば世の中は何はかについてうるさいものゝいつでもかはらで麗しく在ますは大慈悲のおやさまにて候。御慈悲のおやさまを思ひ上げては感じ、大光明の中にある身といふ事を念ふては悅び、たとひ寒風身にしみるも御慈悲の懷のなかはいつでもあたゝかにて候。たとひ無明の世はくらけれども如來光明の中にすむ心は明る

く候。唯ねてもさめても光明名號を稱へてます〳〵信念をすゝめ慈悲の恩容をおもふて御したひ申候。一人の慈悲のおやさまをおもひ上るについても、おもふのはやはりきよき同胞のことにて候。何れ遠からず御目にかゝることを樂しみ候。

二百五

當國に參りてより兩三日ことに地を轉じて日々に聖旨に仕へまつる事に忙はしなく寸時もいとまなくしてもはやけふとはなりにけらし。（中略）此後四月末まで一日も空日なしにもはや約束も相成り候て、夜を日につぎての傳道せはしなきなかに、有りがたさはすきまなく候。皆樣　大ミオヤのみひかりのなかにます〳〵向上したまはんことを希候。

二百六

大ミオヤの恵みによりて春の和らけき氣候とも相成り朝日に匂ふ櫻花も咲き初めぬ。皆様の心の花もかぐはしく匂ふことならめとはるかに存上候。相變らず日々に傳道上のことにいとまなく夜を日につぎて奉仕致居候。

二百七

今年の寒中は　大ミオヤのいと溫かなる御懷と等しき御親切なる御保護のもとに寒さへ覺ほえず過しけることのかたじけなさよ。殊に皆さんと共に　大ミオヤの靈德を讃美し頌歌して御恩を報じ奉りしことのうれしさよ。

結城を經て十二日には常陸の馴馬てふ所の山崎家にて二夜を過しける。同家は知名の舊家にて、父子ともにいと篤心なる求道者にて、この闇黑なる地にはめづらしく、他日光明宣傳の導線となることならんとたのもしく存じ候。十六日より三日間自坊にて歸敬式を執行し百五十餘の洗禮者を發見したるは偏に是　大ミオヤの深き御恵みと存

じ候て厚く感謝することに候。日々夜を日につぎての傳道上のつとめ、今日は時間にせまられて當教會に向ふ道すがら關東平野の北つかた日光の山巍々とあらはれしかたをながめて、我きよき同胞のなつかしさに　大ミオヤの御名をとなへながら松戸の町には着きにける。わづかのいとまをぬすみて端書によりて分袖以來の略歴をしるし候。

二百八

光陰のすぎゆくことはいと疾く明日をと待ちたりしことは忽ち昨日の事となり來年と望みし樂みはいつか去年の夢となりぬ。まことにはかなき人の身の上よとは嘆くものゝ然しながら能く　大ミオヤの深き御むねを觀じ奉れば人生は夢にあらず正しく　大ミオヤより命ぜられたる天職を果さんが爲に身を此の世界に下されたり。此世は是　大ミオヤの在ます常樂世界に騰進すべき豫備科の學校の如きものなり。豫備科

の學校が無終にして盡るときなしとすればいつか目的の光明土に昇進することを得ん天地萬物悉く　大ミオヤの權能によりて成りし物人生何ぞ無意味なるものぞ。大ミオヤは法身としては天地萬物を開展し我々を生存せしめ報身としては十二の光明を以て我々を攝取し法身より稟けたる心性の煩惱を靈化し光明化して成佛せしめ玉ふ。大ミオヤの光明を得たるのちは日々に作す處の一切の作業として佛道ならざるはなし。すべての職務はみな　大ミオヤの命のつとめなればいさみ進んで爲すは必ずミオヤの聖旨にかなふべし。尙また後のたよりに讓り候。

二百九

日かげの駒のいとはやくいつの間にやら十とせあまりの年月は經にけらし。何か生をへだてゝ御會見いたすような感じにて候。其後の我が經歷談を暫らく聞き玉へよ。

三十一年より三河、尾張、美濃、伊勢の地方また東國にても例の阿彌陀經を播布に

熱心し少青年のために佛種を下さんとの志より已に十有餘五萬部まで施與して弘通したりき。其後少しく健康を害して關西に二年ほど出張を止めて東國にて傳道に從事したりし。三十四五年頃大に感ずる處ありて傳道の餘暇淨土教の哲學的方面に研究するのことにつとめて、大に得たる處あり。關西佛教盛なる土地に於て僧侶衆の請によりて自己研究の淨土教哲學を講習せること十數ケ所にて開きたりき。

之を仰げば彌高く之を鑽ればいよ〳〵かたく實に廣大其深不可思議なるものは彌陀の光明なり。

古人曰く、彌陀は名を以て衆生を度すと。

元祖大師は十八歳の時より四十三歳に至るまで一切聖經は勿論所有る宗旨の學問にまで研究に精を盡し一切佛教中よりえらみ撰んで彌陀の名號を抽きて所歸を定む。撰擇念佛集は是宗祖が一切佛教中にえらみぬきて集めたるものなり。其撰擇の眼目は名號にあり。名は即ち體を徴す。阿彌陀の名の中に如來の三身四智乃至一切萬法悉く

具備して餘りなしと。此の芳躅により
阿彌陀の聖名を開きたる
彌陀の十二光聖名其靈德を詮表する處の洪名のみは唯誇大的に無量無邊の靈名を列ねたるものならむやと
專ら佛力を仰ぎて念佛三昧門を開き絶對的無限の靈德より表顯せる十二光の靈名に於て十方一切の世界一切衆生を攝取同化し給ふ處の眞理を知見せられたり。實に如來の境界は凡夫心力の及ぶ處にあらず此神秘不測の妙境を窺はんと欲せばいかなる方便を以てか之を能くせむ。

空拳を以ていかでか千重の鐵關を打破することを得ん。此大鐵關を開くの妙鍵は即ち十二光名によりて其體を發悟するにありと。古來千聖出て名を以て體を獲得すべき徑路を示し給へどもいまだ之を開きて十二名を以て諦に如來の體相用を窺ふべきの眞理をのこし給　しは深意あり、後昆をして此靈名によりて廣く深く細に微に如

來の聖德を獲得せよとの聖意ならむ。

世間文化大に發達せり。宗教のみは獨り開發せざるの理あらむや。こゝに於て如來竊かにこの愚昧なる小弟子をえらみて之を開くべきの寶鑰を授與し給へるなり。故に撰ばれたる小弟子自ら不敏を顧みず十二光によりて如來の靈德を密かに開くの命を奉ず。自ら感謝措くことを知らざるなり。

宇宙の眞理は悉く十二光によりて示せり。

依つて如來光明三昧を以て主義とし・奉るなり。

世の闇と罪と惱とにまどひつゝあるものに此光明を與へむと欲して止まざるなり。

三世諸佛は此光明によりて成佛し給へり。

一切の聖賢は此靈德によりて得度し給へり。

其のち寢てもさめても光明三昧にて。此光明を惣表するものは**なむあみだ**佛に

て候。

此度隨行の宮本てふ眞言宗の僧も矢張り光明名號宗と内心歸化したるものにて候。而して同人があづかりし寺院の信者等を光明に攝せんがためにこの度我を招きしものにて候。

こまゞしきことは何れ御面もじにゆづり申述べたきことはとてもつくべくもあらじ。

二百十

其のちは絶へて御無音に過し候。此程小川様よりの御話によれば三郎さんには御病氣の爲に入院なされし由、おもへば世はまゝならぬ事のみ多し。されば教祖釋迦世尊が曾つて王宮に在ませし頃老病死を見て世の無常をさとり願くば自他共に無老不病不死の門を開かんが爲めに國と位とを捨てゝ無爲の眞門に入りつひに世

の爲に眞實永恒常住の道を悟り玉へり。佛敎多門なりと雖正しく如來の眞意の歸する處は

無量光如來を信じ一ら光明の名號を稱へ如來の光明を獲得して光明の生命を得る處にあり。如來の光明には現在と未來との隔てなし。現在と未來との別を見るはしばらく衆生の妄分別よりはかる處如來は絶對無限の大光明者にましませば只々光明の名號を稱へて光明の中に信入する處にあり。

願くば令息三郎君の爲めに

大なる**ミオヤ**無量光如來の光明のあることを信念せしめ永遠にいける精神となるべきやうに御すゝめのほどを望ましく候。實は先日しばらくの時間を得れば御たづね申上度所存の處當地に出發のみぎり、つひに意を得ずして途につき候。

願くば光明名號の御すゝめせられんことを。先は御すゝめまでに如此御座候。